

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

:愛され続けてきたオズ

小田 梨加

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

ドロシーはお百姓のおじさんとそのおかみさん、そして愛犬トトと一緒にカンザスの大草原の小さな家に住んでいました。

そんなある日、突然たつまきがやってきて家ごと巻き込まれ空中に浮いてしまいました。家が動かなくなったと思うと家は美しい緑の芝生が広がる素晴らしい風景のなかにありました。

ドロシーが外に出てみると、奇妙な服装をした4人の魔女がやってきてドロシーに何か魔法の力がそなわった銀の靴を渡しました。

ドロシーはカンザスから遠くはなれたところに来てしまったとわかるとその魔女に帰る方法をたずねました。すると魔女はエメラルドの都に行って大魔法使いのオズさまに助けをもらうよう言いました。ドロシーはもらった靴を履いて都を目指して歩き始めました。

何マイルも進んだところにトウモロコシ畑があり、そこにはぼろぼろのかかしが立っていました。オズさまに会いに行くと伝えると、わらでできた自分は脳みそをオズさまに分けてほしいと言い、かかしとの旅が始まりました。

2人が木々の茂った道を歩いて行くとブリキのきこりに会いました。自分は心臓がほしいと言い、きこりも旅についていくことになりました。

ドロシーとその仲間たちが深い森のなかを進んでいくと臆病なライオンに出会いました。自分は勇気がほしいと言い、ライオンも旅に加わりました。

たくさんの危険を乗り越えて、ドロシーたちはついにエメラルドの都にやってきました。門番につれられてオズの住む宮殿につれてこられ、オズさまに会うことができました。オズさまの姿を直接見ることはできませんでしたが、オズさまは悪い西の魔女を殺したら願いをかなえてやろうと言いました。

西の魔女を退治するためにウィンキーの国をめざしてふたたび旅が始まりました。

西の魔女は望遠鏡のように目がよかったのでドロシーたちが自分の国にむかっているのにすぐ気づきました。そしてオオカミやカラス、ハチの大群にドロシーたちを攻撃させました。しかしドロシーたちは力を合わせてこの敵をなんとかやっつけました。魔女の城にたどり着くとドロシーは魔女に水をぶっかけました。すると魔女は溶けていき、みるみるうちに小さくなってしまいました。ついに魔女を退治したのです。

ドロシーたちはオズに会うためにまたエメラルドの都に帰ってきました。オズの玉座に行くと、そこにはしわだらけで小柄な老人が立っていました。みんなはこの人がオズさまであることに驚きました。願いを叶えてもらおうとすると、その老人は、自分は魔法使いではないと言いました。都の者は魔法使いと信じているが自分はオマハで生まれたふつうの人間だと。ドロシーたちは騙されていたことに腹が立ちました。

みんなの望みを叶えるから2・3日時間がほしいと言いました。そして数日後、魔法使いはまずかかしを自分の部屋に呼びました。そして頭の中のわらを取り出し、代わりにもみがらをつめこみました。かかしは1番の望みが叶えられて大喜びです。次にきこりが呼ばれました。魔法使いはきこりの左側の胸に四角い穴をあけて、おがくずの入った小さな絹の心臓をいれました。きこりは喜びいさんでみんなの元に戻って行きました。次にライオンが呼ばれました。魔法使いは戸棚から緑色のびんをとってきて中に入った液体を美しい皿につぎました。それを飲んだライオンは体中が勇気でいっぱいになったと大喜びです。数日経ってドロシーが呼ばれました。すると魔法使いは、気球に乗って一緒に帰ろうと言いました。魔法使いも自分がだまし続けてきた都から逃げようというのです。

気球の準備をして飛び立ち始めたときドロシーはトトがいないことに気づきました。トトを連れてくるためにドロシーは気球を降りましたが、しかし気球は止まりません。老人だけが1人旅立って行きました。ドロシーは家に帰る方法がなくなって絶望しました。

そこで都の兵隊に相談してみました。すると南の国の魔女なら叶えてくれるかもと教えてくれました。ドロシーたちは南の国に向けてふたたび出発しました。仲間に助けられながらドロシーは南の国に着き、魔女に会うことができました。魔女はかかしをエメラルドの都へ、きこりをウィンキーの国へ、ライオンをけものたちの住む大きな森へ、それぞれ行きたいところに連れていく約束をしました。そしてドロシーには、靴のかかとを3回打ち合わせて3歩歩くだけでその銀の靴が行きたいところどこへでも連れて行ってくれると教えました。

3人に別れの挨拶をするとドロシーは早速教えられたとおりにしました。するとものすごい勢いで空中を運ばれて行きました。きづくどドロシーはカンザスの草原にいました。ドロシーに気づいたおばさんは「まあ、ドロシー！」と叫んでドロシーを強く抱きしめました。

「いったい、どこから帰ってきたの?」「オズの国からよ。あたし、家に帰ってこられてほんとうに嬉しいの!」

愛され続けてきたオズ

1888年、ライマン・フランク・ボーム(Lyman Frank Baum,1856-1919)と妻はサウスダコタ州のアーバーディーンに移った。そこで彼は地方新聞の編集者になり、コラムも寄稿した。『オズの魔法使い』(The Wonderful Wizard of Oz)におけるカンザス州の描写は乾燥しきったサウスダコタでの経験に基づいている。

1899年、ボームはイラストレーターのデンスロウと組んで詩集を発表した。この本は児童書としてその年のベストセラーになった。

1900年、2人は『オズの素晴らしい魔法使い』(日本語タイトル『オズの魔法使い』)を刊行し批評家から絶賛を浴びた。この話はボーム自らが子供たちに語って聞かせた物語がもとになっている。2年間にわたり児童書のベストセラーになり、その後ボームはオズの国や住人を扱った続編を13作も書いている。ボームによるオズシリーズの最終巻「オズのグリンド」は彼の死後である1920年に刊行されたが、シリーズは別の作家たちによって書き続けられてきた。

私はいままでこの物語を一度も読んだことがありませんでした。でもこの歳で読んでもとてもおもしろく、これが長年世界中の人々に愛されている理由なのだなと思いました。ドロシーとその仲間たちの友情にとっても感動させられました。

(おだ・りか：欧米言語文化講座 仏語圏)

バウム『オズの魔法使い』

:19世紀末のアメリカ経済

山浦絵梨奈

ライマン・フランク・バウム『オズの魔法使い』

ドロシーは、アメリカにあるカンザス州の大草原の真ん中で、ヘンリーおじさんとエムおばさん、小さな黒い犬のトトと一緒に小さな家に住んでいました。トトと明るく暮らしていましたが、ある日、灰色をした空のむこうから、突然たつまきが近づいてきました。ドロシーとトトは家から逃げおくれでしまい、家ごと空にふきとばされてしまいました。

家の動きがとまり外に出てみると、信じられない光景がドロシーの目にとびこんできました。まわりには美しい緑のしばふが広がり、大きな木々には実がたくさんぶらさがり、花がさきみだれ、鳥がとび回り、小川がきらめき流れ、それはもうすばらしい風景でした。そのときドロシーに、かわった格好をした人たちが近づいてきました。そのうちの女性が、「すばらしい魔法使いさま、マンチキンの国においで下さり、東の魔女を殺していただき、本当にありがとうございます。」といいました。彼女は北の魔女らしく、なんでも、ドロシーの家が落ちたおかげで東の魔女が死んだというのです。「このオズの国には4人の魔女がいて、北と南がいい魔女で西と東は悪い魔女なのです。」と続けました。ドロシーは、どうすればカンザスに帰ることができるのか、北の魔女にたずねました。すると、オズの国のまわりには砂漠が広がっていて、国を出ることができない、そう答えました。しかし、「オズの国の真ん中にある、エメラルドの都にいきなさい。たぶん、オズさまが助けてくれるでしょう。」といいました。大魔法使いオズが支配するエメラルドの都へは、黄色いレンガをしいた長い道をずっと歩いていかなければなりません。こうして、オズの魔法使いにあうため、ドロシーのエメラルドの都への旅が始まりました。

出発してまもなく、棒で背中をまっすぐにささえられたまま、トウモロコシ畑を見下ろすかかしに会いました。かかしは生きていて、ドロシーは棒をとってやりました。このかかしは中身がわらなので、脳みそを持っておらず悲しんでいました。「じゃあ一緒にエメラルドの都へいきましょう。オズさまに脳みそをわけてくれるようおねがいしましょう。」かかしはとてもよろこんで、一緒に出発しました。

また歩いていくと、太くて低いうめき声がかきこえてきました。すると、ブリキでできた人間が斧をふりあげたまま、じっと身動きせずに立っていたのです。ドロシーは油をさしてやりました。ブリキのきこりは、体が全部ブリキになってしまい心臓がなくなってしまったので、心臓をほしがっていました。「じゃあ一緒にエメラルドの都へいきましょう。オズさまに心臓をいただけるようおねがいしましょう。」こうして、ブリキのきこりも一緒に出発しました。

ドロシーとその仲間たちが深い森をすすむと、ものすごいうなり声が聞こえてきました。突然大きなライオンがみんなをおそってきたのです。ドロシーは体の大きなライオンが弱いものいじめすることにおこり、おくびょうものといいました。するとライオンは、おくびよ

うものだと自分でもわかっている、だから勇気がほしいんだ、といいました。「じゃあ一緒にエメラルドの都へいきましょう。オズさまに勇気をいただけるようおねがいしましょう。」こうして、ドロシー、かかし、ブリキのきこり、ライオン、トトはまた、エメラルドの都に向かって出発しました。

たくさんの危険におそわれながらもみんなで乗りこえ、ついにエメラルドの都に到着しました。すると頭のとっぺんからつまさきまで肌も服も全部緑色の門番が立っていて、その男は、エメラルドの都のきらめきで目を痛めないよう、緑のめがねをかけるよういいました。おかげで目に映るものは全て緑色でしたが、とてもすばらしい景色でした。そしてとうとう、オズの魔法使いに会えることになりました。オズは、ある時は大きなはげ頭、ある時は美しい貴婦人、ある時はおそろしい獣、またある時は火の玉となって現れました。そのさまざまな姿にみんなはとてもおどろきました。そしてみんなの望みを聞いたオズは、ドロシーたちが西の悪い魔女を殺すことができたならそれぞれの望みをかなえてやる、と約束しました。

西の魔女をたおすため、ドロシーたちの旅が始まりました。旅の途中で、西の魔女の命令をうけた飢えたオオカミ、カラス、黒いハチの群れにおそわれましたが、みんなやっつけました。そして1度はつかまってしまいましたが、ついに、西の魔女を水でとかして殺すことができたのです。

エメラルドの都にもどり、ドロシーたちはオズに、約束した望みをかなえるようたのみました。しかしオズはなかなかかなえてくれません。おこったみんながつめより、ライオンがおどろかすと、部屋のすみに置いてあったついたてがひっくり返り、はげ頭で、しわだらけの顔をした、小柄な老人が立っていました。「おまえは、いったいだれなんだ？」と聞くと、老人は「わしがオズの大魔法使いだ。」といいました。そう、この老人がオズの正体であり、今まで国中の人々をだましてきた、ただのサギ師だったのです。それを知りドロシーたちはがっかりしました。望みがかなわないからです。

でも本当は、旅をしている間に、すでにかかしにはすぐれた脳みそが、ブリキのきこりには立派な心臓が、ライオンには勇気がそなわっていました。みんなはそれに気づいていなかったのですが、翌日、オズの小さな魔法によって、望みがかなったと思いきよこびました。でもドロシーだけはちがいました。「カンザスに帰りたい。」そう悲しみ泣いていたところへ、エメラルドの都の兵士から、南の魔女をたずねてみるといい、といわれました。

ドロシーたちは南の国に向かい、南の魔女に会うことができました。南の魔女は、若くてうつくしくみえました。ドロシーの話を知ると南の魔女は、「あなたの銀のくつがあなたをはこんでくれるでしょう。かかとを3回打ちあわせ、自分の行きたいところをいえばそれでいいのです。」といいました。実は、東の魔女からとった銀のくつには、いろんな、すばらしい魔法の力がそなわっていたのです。

カンザスに帰ることを決めたドロシーは、かかしやブリキのきこりやライオンにそれぞれ別れのあいさつをしました。長いあいだ一緒に苦労したので、別れるのはとてもつらいことでした。南の魔女にも別れをつけると、トトをだいたままくつのかかとを3回打ちあわせて、「エムおばさんのところにつれて行って！」といいました。ドロシーはものすごいスピードで空中をはこばれ、銀のくつで3歩あるいただけで突然止まりました。あたりをみまわしてみると、なんとそこは広々としたカンザスの草原の上だったのです。

ドロシーは家の中から出てきたエムおばさんのもとへ走っていき、気づいたエムおばさんはドロシーを強く抱きしめ、「まあドロシー！いったいどこから帰ってきたの？」という、「オズの国からよ。あたし、うちに帰ってこられて本当にうれしいの！」そう、ドロシーはいいました。

19世紀末のアメリカ経済

I. 作家と作品について

「マザー・グースの物語」の大ヒットで童話作家として成功していたライマン・フランク・バウム (Lyman Frank Baum 1856-1919) が、自ら子供たちに語ってきかせた物語を元に置き、1900年5月に出版した。凝った構成によるカラー図版の児童書は当時としては革新的であり、本はたちまち子供たちの心をとらえ、増刷の追いつかない空前の人気作品となった。

II. 金銀複本位制

「オズの魔法使い」は、金銀複本位制への移行が焦点となったアメリカの1896年の選挙を背景としている。金本位制というのは、通貨を一定の量の金と常に替えることができる制度である。金銀複本位制なら金銀の両方である。

1880年から1896年にかけて、アメリカの物価水準は23%下落していた。これは金本位制を採っていたアメリカ経済の拡大に対して、金貨の供給量が追いつかなかったためである。当時の農民のほとんどが東部の銀行からの借金で開拓を行っていたが、デフレーションの発生は借金の実質的価値を増大させ、西部の農民は苦しみ、東部の銀行が何もせずに潤うという事態が発生した。

故郷のカンザス州から遠く離れた不思議な土地に迷い込んでしまったドロシー (=アメリカの伝統的価値観) は、かかし (=農夫)、ブリキのきこり (=工業労働者)、臆病だが雄叫びがすごいライオン (=民主党候補) と友達になる。そして迷ってしまった自分を家に帰することができる魔法使いがいるエメラルドの都を目指す。

一行はエメラルドの都 (=ワシントン) に到着するが、そこでは皆が緑色の眼鏡 (=緑色のドル紙幣) をかけて世の中をみている。魔法使い (共和党候補者) は皆の願いをかなえられるようにみせかけているが、偽者であることがばれる。

最後にドロシーは、自分の銀のくつの魔力 (=銀も本位通貨にすること→金銀複本位制) を知って、その力によりついに家に帰ることができた。

…金と銀、金本位制をめぐるの共和党と民主党の論争は1896年の大統領選挙において最も重要な論点となったが、これに関して、「オズの魔法使い」が寓話とも解釈されるようになった理由である。

(やまうら・えりな：欧米文化言語講座 英語圏)

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

:オズワールド

二宮 亜哉奈

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

ドロシーは農夫のヘンリーおじさんとその奥さんのエムおばさんとアメリカのカンザス州にある大草原に住んでいました。ある日、ドロシーと飼い犬トトは、竜巻に巻き込まれ家ごと吹き飛ばされてマンチキンという小人の国についた。

マンチキンは東西南北にひとりずつ魔法使いがいて、東と西には悪い魔法使い、南と北は良い魔法使いがいた。そして、中央にエメラルドの都があり、オズという魔法使いがいるという。東の魔法使いは、ドロシーの家が飛んできたとき、下敷きになって死んでしまった。ドロシーはオズが、カンザスの家へ帰る道を教えてくれるかもしれないという情報をもとに、エメラルドの都へ旅をすることになった。その途中、頭のからっぽなかかし、心のないブリキのきこり、臆病なライオンにあい、いっしょに都をめざすことになった。かかしは脳みそを、ブリキには心を、ライオンには勇気をもらうために。

エメラルドの都につくと、門番はみんなに緑色のめがねをかけさせた。だから何でも緑色に見えた。オズは、ある時ははげ頭、ある時は貴婦人、ある時は火の玉になって現れ、ドロシーたちが西の悪い魔法使いを殺したら、それぞれの望みをかなえてやると約束した。

旅の途中、ドロシーたちは西の魔法使いの命令をうけた飢えたオオカミ、カラス、黒い蜂の群れに襲われたが、これを迎えうちにしたばかりか、ついに西の魔法使いを水でとかして退治する。エメラルドの都にもどり、オズにのぞみをかなえるように頼んだところ、オズはただの小さな奇術師にすぎないことがわかった。

みんながっかりしたところ、旅をしている間に、すでにかかしは優れた頭脳が、きこりは立派な心が、ライオンには勇気がそなわっていた。そして、「おうちのエムおばさんのところに連れて帰って！」

南の魔法使いに、両方のかかとを3度打ちつけ、行きたいところを告げるようにいわれると、あっという間にドロシーはカンザスの家へ……。

(大日本絵画 出版)

オズワールド

I. 作者について

ライマン・フランク・ボーム。ニューヨーク州チッテナンゴ村でメソジスト派の家庭に9人兄弟の7番目として生まれた。父ベンジャミンはドイツ系、母シンシアはスコットランド系であった。「ライマン」の名は父方のおじに因むが、ボームはこのファーストネームを嫌っておりミドルネームの「フランク」を常用した。俳優、戯曲家、自主映画制作者としての活動歴もある。

II. 作品について

「マザー・グースの物語」のヒットで童話作家として成功していたライマン・フランク・ボーム（1856年 ニューヨーク生まれ）が、自らが子どもたちに語ってきた物語を元にして書き、1900年5月に出版した。W・W・デンスローが挿絵を担当した。凝った構成によるカラー図版の児童書は当時としては革新的であり、本はたちまち子どもたちの心をとらえ、増刷の追いつかない空前の人気作品となった。初版の1万部は数週間で売り切り、翌年1月までにほぼ10万部が売れた。

オズはシリーズもので、ボームが書いたものは「オズの魔法使い」をはじめとし14冊までである。ボームの死後ほかの作家によって40冊まで続編が出されている。

III. 作品の背景と別の解釈

この「オズの魔法使い」、金本位制の金銀複本位制への移行が焦点となったアメリカの1896年の選挙を背景としています。金本位制というのは、通貨を一定の量の金と常に替えることが出来る制度です。金銀複本位ならば、金銀両方です。

1880年から1896年にかけて、アメリカの物価水準は23%下落していました。これは、北東部の銀行に代表される貸し手には好都合でしたが、南部や西部の農家に代表される借り手には不都合でした。デフレ対策として考えられていたのが、金銀複本位制の実施でした。実施すると国家内の貨幣量が増えると考えられ、結果、デフレが抑制されるためです。

当時共和党候補だったウィリアム・マッキンリーは金本位制維持を公約に掲げ、民主党候補のウィリアム・ジェニングズ・ブライアンは複本位制を支持しました。ブライアンは、「労働者の頭に茨の冠をかぶせるべきではない。人民を金の十字架にかけない（→金本位制の維持によるデフレで人民が苦しむこと）。」と選挙演説時に述べています。

この論争は、1896年の選挙直後に出版されたオズの魔法使いによって見事に寓話化されました。

なぜオズかと言うと、金の単位であるオンスはOzと表現されるからです。

故郷のカンザス州から遠く離れた不思議な土地に迷い込んでしまったドロシー（＝アメリカの伝統的価値観）は、かかし（＝農夫）、ブリキの木こり（＝工業労働者）、臆病だが雄叫びだけはすごいライオン（ブライアン候補）と友達になります。そして、迷ってしまった自分を家に帰することができる魔法使いがいる、オズを目指します。

一行はオズ（＝ワシントン）に到着しますが、そこでは皆が緑色の眼鏡（＝緑色のドル紙幣）をかけて世の中を見ている。魔法使い（＝ウィリアム・マッキンリー）はみんなの願いをかなえられるように見せかけているが、偽者であることがばれてしまいます。

最後にドロシーは、自分の銀のスリッパの魔力（銀も本位通貨にすること→金銀複本位制）を知って、その力によりついに家に帰ることになりました。

選挙は共和党が勝利し、金本位制が維持されましたが、選挙の前後にアラスカ、オーストラリア、

南アフリカで金が発見され、さらに金鉱石からの金抽出を容易にするシアン処理法が考案されたため、インフレは結果的に達成されることになりました。1896年から1910年までの間に、物価水準は35%上昇したのです。

IV. みんなに愛される理由

私は小さいころ「オズの魔法使い」をビデオで何回も見ていました。小さな子にとって次々に登場するキャラクターの個性いっぱいの外見や性格の面白さ、可愛さがとつても面白く人気なのではないかと思います。しかし、「オズの魔法使い」は、子どもにだけでなく、大人たちにも愛されています。それは何故か？私が思うに登場するキャラクターがどこか私たち人間に似ているから共感するからではないでしょうか？

かかしやブリキのきこり、ライオンたちは、それぞれの悩みそ、こころ、勇気を探して旅に出ます。けれど実際それらは、自分たちがないと思っているだけで、本当は誰もが持っているはずのものだと思います。誰だって考える力、優しさ、思いやり、勇気を自分の中に持っています。彼らはその使い方を忘れてしまっただけ。それを、ドロシーと旅をすることによって思いだしていったのです。それって私たち人間が現実世界で悩んでいるものと一緒じゃないでしょうか？オズも私たちと一緒にだと思います。オズはただのドロシーと一緒にの世界から来た人間だったのに、周りが「大魔法使い」だと勝手に思い込み、オズを恐れてなんでも願いを叶えてくれると言ったためオズは誤解を解きませんでした。長いこと暮らしてうちに正体を明かすに明かせなくなってきてしまいました。こんなことよくありませんか？最初はちょっとしたことだったから黙っていた、誤解を解かなかった。しかし後々どうしようもなくなってしまった。そんなとつても私たちに似ているキャラクターたちだから、読んでいてとつても共感できるし、応援できるから多くの人に愛されているのではないかと思います。

V. 物語を読んで

私たち人間は、1人1人がみんな良いところを持っていて、誰もが輝く所を持っています。その輝きをお互いに認め合うことが出来れば、きっとみんな素敵な友達になれます。人間、自分がうまくいかなくてイライラしたり、友達のせいにしたりすることは、しょっちゅう、誰にだってあります。しかし、そんな時こそ、ドロシーたちのように、相手を思いやって、誰かの為に動くことを忘れないでほしいです。私たちは一生、人と助け合っていかなければなりません。そのためには、まず1番に相手を思いやる気持ち、大切に思う気持ちを決して忘れないでください。私はこのようなどとても大切なことを「オズの魔法使い」から、学んだ気がします。みなさん!!もし忘れそうになった時は「オズの魔法使い」を読んでください。そうすれば、きっと大切な何かが見えてくるはずです。

参考文献

○オズの魔法使い (ライマン・フランク・ボーム著) 訳 武田正代 山形浩生

○オズの魔法使い Wikipedia

(にのみや・あやな：中学校教員養成課程 保体)

『エルマーのぼうけん』

:化学者ルース・スタイルス・ガネットが愛した色と数の世界

松江志穂子

<作品について>

○アメリカ児童文学『MY FATHER'S DRAGON』は1951年にアメリカで発行され、1963年に『エルマーのぼうけん』として日本で発行される。

○その後、1964年に『エルマーとりゅう』、1965年に『エルマーと16びきのりゅう』が発行され3部作品として広く読まれる。

○また『エルマーの冒険』というタイトルでアニメ映画として1997年7月5日に公開されている。

<作者について>

作：ルース・スタイルス・ガネット (Ruth Stiles Gannet)

1923年ニューヨーク市で生まれる。バツサー大学卒業。化学者として医学研究所や電波探知機の研究所で勤務。児童図書協議会の職員として働く。

絵：ルース・クリスマン・ガネット(Ruth Chrisman Gannet) (作者の義理の母)

1896年アメリカ・サンタアナ市生まれ。現代アメリカの挿絵画家の中で最も有名な画家の一人。1979年没。

訳：渡辺茂男

1928年静岡県生まれ。慶應義塾大学卒業。ウェスタンリザーブ大学院卒業。ニューヨーク公立図書館児童部にて勤務。慶應義塾大学図書館化学教授。2006年没。

ガネット『エルマーのぼうけん』

9才のエルマーはある日、町で出会った猫からジャングルで輸送機としてひどい扱いをされているりゅうの子どもの存在を知らされる。飛行機乗りになるという夢を持っているエルマーは飛ぶことに関して人一倍敏感であり、その空を飛びりゅうの話を知りて大変興味を持ち興奮した。そして、勇敢で好奇心旺盛なエルマーは「飛びたいさ。飛べるなら、何でもするよ」というような意気込みですぐさまりゅうを助ける任務を引き受けてしまったのである。旅へ出る前に、猫からジャングルまでの道のりやそこに住む動物たちのこと、必要な持ち物などを詳しく教えてもらい、こっそりと夜の港の船に侵入し、いよいよ危険な大冒険へと出発した。

ジャングルにはたくさんの猛獣が住んでおり、エルマーはもちろんりゅうの所にたどり着くまでに何度も猛獣の餌食になりかける。しかし、猫から指示された道具を上手く使い、狡猾かつちょっと笑ってしまいそうな方法で普段怠け者の動物たちをだましていく。最後は、ジャングル中の動物を巻き込み、間一髪のところできりゅうを助けだすことに成功した。

その後エルマーとりゅうは空を飛んでそれぞれの故郷へと帰るのであるが、りゅうの故郷ではりゅうの15匹の家族が人間によって洞穴の中に閉じ込められていた。そこで動物園に売り飛ばすという人間の計画を耳にしたりゅうは、何としてでも家族を助けなければならないと思い、エルマーに助けを求めに行った。途中何度か町の人々に目撃されながらもエルマーの所までたどり着き、さっそく猫も入れた3人で家族を助ける計画を立てた。全て音色の違う笛とラッパが16ずつ・ピストル1丁・ピストルの弾・丈夫なひもを1束・板チョコ6枚・干しいちじく6箱を持って、さあ出発だ！

化学者ルース・スタイルス・ガネットが愛した色と数の世界

I. 赤色×空色×黄色

赤色・青色・黄色と言えは色の三原色であり、りゅうの体色もほぼこの3色で構成されている。空色については、エルマーの「将来飛行機を持つ」という夢・空を飛ぶことへの憧憬を満たしてくれた「掛け替えのない存在としてのりゅう」、そして何よりも2人で空間と時間を共にし絆を強めてきた「空」を強調して表現したのであろう。また、りゅうの家族は彼を含めて16匹で成り立っているのであるが、その一匹一匹の色や模様の違いには私たちの想像を一層楽しませてくれるような面白い個性（違い）があり、それと同時に全体的には家族としての一体感を強めているような統一感も感じられる。

<りゅうの16匹の家族>

○共通点：金色の羽・赤色の足先と爪と角

○父：空色一色/母：黄色一色

○女兄弟6匹：みな緑色ではあるが、厳密に言うとは黄緑色から青緑色まで様々な緑色のりゅうがいる。

○男兄弟8匹：みな空色と黄色が基調ではあるが、縞模様の間隔が違っていかつ、縦縞や横縞があったり、水玉模様やぼち・ぶちがあったり、パンダのように黄色と空色が配置（しかし頭と体と足一本が黄色で、他の足3本としっぽが空色という面白い配置である）されていたりする。

上記で述べた色の三原色（つまり赤・青・黄）を多様に組み合わせさせて混ぜ合わせると、白と黒以外の単色ができるが、まさにこのりゅうの家族も父・母の色を基礎とした様々な色が個性豊かに表れている。特に、女兄弟の黄緑色から青緑色のグラデーションはまさに父・母の2色の色の割合を少しずつ変えたものであり、6匹の色を順番に並べて想像した読者はその美しさと、またそれぞれの微妙な違いの中にも色の魅力を感じ取ることができるであろう。混色の素晴らしさを見事に体現したものと言える。

さらに、作者はこのりゅうの家族のカラフルな色の光景が「イースターのお祭りの行列みたいだ」と記述している。イースターのお祭りとは復活祭とも呼ばれ、十字架にかけられて死んだイエス・キリストが3日目によみがえったことを記念する日である。祭りの行列は、太い鎖をイエス役の人につけて引きずり回すというとても危険なものであるが、参加したい人は誰でもグループをつくって申請することができる。また、その他の習俗にはイースターエッグとイースターバニーというものがあり、前者は殻に鮮やかな色彩を施した美しい包装をしたゆで卵を出す習慣であり、現在ではチョコレートで作られた卵やお菓子を詰めたプラスチックの卵で代用されている。両者とも古来から豊穡のシンボル（卵とうさぎ）としてお祭りの際に用いられてきた。本書には記述されていないが、このイースターエッグもエルマーの世界の色の鮮やかさを感じさせるものがある。

イースター祭りの行列

<<http://www.ima-earth.com/contents/entry.php?id=2009422155749>>

このように、この作品では様々な色彩の主張がされており、読む者を視覚的に楽しませる実力と魅力が確実に存在する。私自身もその魅力の虜となった一人であり、今なお記憶に刻まれた色彩の残像が、本レポートを書くにあたってこの作品を選ばせた所以でもあることは事実と言えよう。また、私が児童としてこの作品を読んでいた頃の影響力は多大なものであり、夏休みの工作で紙粘土を使用しエルマーとりゅうの造形物を作ったり、授業の一環としてグループで「エルマーのぼうけん」の紙芝居を作ったりした経験がある。つまり、私にとってこの作品は単に心に残る米文学作品というものではなく、幼少時代の多大な可能性を秘めた芸術的創造力を高めてくれた掛け替えのない存在なのである。ちょうどエルマーとりゅうのように。

Ⅱ. 化学者ルース・スタイルス・ガネット

この作品の作者、ルース・スタイルス・ガネットはニューヨーク市で生まれ、パッサー・カレッジを卒業した後、しばらく化学者として医学研究所、及び電波探知機の研究所で働いていたが、自分の本当の興味は児童文学にあると悟り、児童図書協議会の職員として働くようになったとある。化学者から児童文学作者への移り変わりは稀のように思えるが、この作品の中にはやはり化学者を思わせるような特徴が多く見受けられ、読んでいる人が一層物語を楽しめるような役割を果たしている。

まず、エルマーとりゅうがみかん島から自宅へ帰る途中嵐に見舞われカナリアの島に漂着する場面であるが、そこで流行している病気が「しりたがり病」なのである。島の王様が宝箱の中身を知りたくて病気になる、さらに島のカナリアたちも王様が何を知りたがっているか秘密にされているためそれが知りたくて病気になるという少し込み入った展開である。ともかく、知りたくて仕方がない気持ちが病にまで発展するという内容は研究を職としてきた化学者としての経験が反映されているようにも感じられる。

さらに、この作品ではどの部分を読んでも読者が始終気になって仕様がなくなるような要素が含まれている。それは、どんなものにも数字をつける作者の記述法であり、時には無意味とさえ思えるような綿密かつ徹底したこだわり様が感じられる。例えば、「エルマーの持って行ったものは、チューインガム・桃色の棒付きキャンディー2ダース・輪ゴム1箱・黒いゴム長靴・磁石が1つ・歯ブラシとチューブ入り歯磨き・虫眼鏡6つ・先の尖ったよく切れるナイフ1つ・くしとヘアブラシ・違った色のリボン7本・・・ピーナッツバターとゼリーを挟んだサンドウィッチを25と、リンゴを6つ持ちました。」や「あんまりお腹が空いていたので、トマトスープを3杯と、ライ麦のパンを5切れと、ミルクをコップに4杯と、たまごの目玉焼きを6つと、大きくきったカステラを2つ食べました。」等の記述である。確かに、前者のエルマーの所持品に関しては後々ジャングルで出くわす動物たちの数に一致しており十分前触れの役割を果たし、作品の完成度を高める要素として効果的であるかもしれないが、後者の記述のように結局最後までその数字の意味を見いだせないものも多々あるのだ。特に異常なのがみかんの数である。この作品のストーリーではみかん島を經由してジャングルや自宅へと移動をするため、みかんを食べる場面が相当な回数あるのだが、その数の足し引きにはどのような意味が込められているのか解説することができなかった。

ということなどがわかって来ると面白くなってきて書きやすくなった。私自身も普段こういう課題が出された時にしか本は読まないが、これを機に色々本を読んでみようと思った。

<みかんの数の変異>

(※「-」マイナスマークは食べたという意味であり、「=」イコールマークはいくつ残ったかを示すものである)

① みかん島からジャングルへ行き、またみかん島へ帰ってくる間

3 1リュックにつめる-7+7つめる-8-3-3-4=13

② みかん島へ帰ってきてリュックからではなく木からそのまま取った分木から直接とって19食べる。

③ みかん島から自宅まで69リュックにつめる-11-15-4-8-12-9-10=0

さらに、①のみかんの最終的な残存量についてであるが、最後にみかんを4つ食べた場面において「あと13コしか残りません」という記述があるにもかかわらず、その後リュックサックから13のみかんを取り出して食べたという記述がなく、②・③とまた新しいみかんの採取に取り掛かっているのだ。数字にこだわる化学者ならば、結果をぼやかしたり適当な記述をすることはないと予想されるが、やはりその行方は特定できず、それならば逆に数字にこだわったのではないかと考えるようにもなった。つまり、キリスト教が主な国教となっているアメリカでは13という数字はキリストが死んだ日として不吉な数字とされているため、何かの暗示のために読者を惑わすよう仕向けたのではないかと考えたのである。もちろん、このような推測は勝手な判断であり、それを裏付ける理由も提示することは出来ないのだが、気づけばこのような思索をする私は少なくとも作者の数字による妙技、もしくは数字の世界への誘惑に完全にのめり込んでしまっていたことは確かである。多くの読者がこの本を読み進める際、意識するでもなくペンを片手に取り数字を記録してしまっていたことであろう。そう、エルマーの作者ガネットは、豊かなユーモアと現実味あふれる細部描写をナンセンスと融合させることのできる作者であると高い評価を受けている人物なのである。

(まつえ・しほこ：欧米言語文化講座 英語圏)

<参考資料>

URL

作者について

<http://www.fukuinkan.co.jp/ninkimono/elmar/writer.html>

復活祭について

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A9%E6%B4%BB%E7%A5%AD#.E3.82.A4.E3.83.BC.E3.82.B9.E3.82.BF.E3.83.BC.E3.83.BB.E3.82.A8.E3.83.83.E3.82.B0>

アンドルー・ラング 『シンデレラーガラスのくつのものがたりー』

：シンデレラのストーリーは著者によってどのように違うのか

山口由華

アンドルー・ラング『シンデレラーガラスのくつのものがたりー』

むかしむかし、一人の男の人がいました。男の人はある女の人と二回目の結婚をしたのですが、その女の方は、いつもえらそうにして、お高くとまっている人でした。女の方にして二回目の結婚で、二人の娘がいました。その娘たちときたら気まぐれで、本当に何から何まで、その女の方にそっくりでした。同じように男の方も、幼い娘がいました。誰よりも思いやりがあって、優しい心をもった少女でした。

結婚式がとり行われてまもなく、継母はその本性をあらわしはじめました。かわいらしくて、人がよい、この少女がいると、自分の娘がなんともみじめにおもわれるので、ひどく邪魔に思えました。そこで少女を、とびきりみじめな仕事につかせようと思いたちました。お皿を洗わせ、テーブルをふかせ、自分や娘たちの部屋をめいっぱい掃除させました。部屋までみじめにしようと、せまくて暗い、屋根裏部屋においやってしまいました。

少女は仕事がおわると、いつもかまどのある小部屋へ行きました。そこは灰でいっぱい、いつもその中で座っていました。そのためみんな少女を『灰かぶりひめ』という意味の、『シンデレラ』と呼びました。

あるとき、王子様がダンス・パーティを開くことになりました。シンデレラの家の二人の姉にも声がかかりました。二人は大よろこびで、さっそくドレスはどれにしようとか、あれこれなやみはじめました。けれども、シンデレラにしてみれば、面倒なことが一つ増えただけでした。というのも、姉たちの服をアイロンがけしなくちゃならないし、フリルをつけなくちゃいけない、全部シンデレラの仕事なのですから。

ついに、楽しいその日がやってきました。二人はお城へ出かけていきました。二人の姿が見えなくなってしまったとき、シンデレラは突然悲しくなって、泣き崩れてしまいました。その時、シンデレラの乳母が、泣いているシンデレラを見つけて、どうしたの、とききました。シンデレラは涙が次から次へと出てくるばかりで、ことばが出てきませんでした。そんなシンデレラを見ていた乳母は、じつは、妖精の国生まれの、魔法使いだったのです。「おまえは、ダンス・パーティに行きたいと思っている。違うかい？」シンデレラは、「はい。」とためいきまじりに答えました。乳母はシンデレラにむかって、言いました。「なんとかしてやろうじゃないの。」

それから乳母は、シンデレラを部屋に連れて行き、言いました。「庭に出て、カボチャをもってきておくれ。」シンデレラはすぐに、畑の中で一番大きなカボチャを持ってきました。でもシンデレラは、このカボチャのどこをどうして、ダンス・パーティに行けるようになるのか、まったく思いもつきませんでした。ところが、乳母がカボチャをステッキでちよんとたたくと、カボチャはたちまち、大きくて立派な馬車に変わってしまいました。それから乳母はあつというまに、ネズミをステッキでたたき六頭のウマに、ドブネズミを御者に、六匹のトカゲを六人のめしつかいに変えてしまいました。乳母は、シンデレラにいいました。「ほおら、もうここには、ダンス・パーティに行くには十分な、馬車もお供も、そろったよ。」シンデレラはばかんとしていましたが、あることに気がつきました。「あの、でも、わたし、こんな汚いボロでは、行けない。」そこで、乳母はステッキでシンデレラの服をたたきました。するとどうでしょう、みるみるうちに、シンデレラの服は金や銀、宝石などをちりばめた、立派なドレスに変わってしまいました。そして、乳母は、一足の小さなガラスのくつをシンデレラにあたえました。世界のどんなものよりかわいらしい、素敵なくつでした。こう

して、シンデレラはすっかりおめかしして、馬車に乗り込みました。けれども、乳母は最後に、シンデレラにある注意をしました。ダンス・パーティを楽しむのはいいけれど、夜中の12時を超えてはいけませんよ。もしちょっとでも過ぎたら、みんなもとにもどってしまうよ、と。シンデレラは乳母に、12時までにはダンス・パーティから帰ってきます、と約束しました。それから、すぐさま、馬車は走りだしました。

王子様は、素敵なお姫さまがやって来たときいて、お迎えしようと、さっと出てきました。シンデレラが馬車からおりると、王子様が手を取って、ダンス・パーティの会場へ、案内してくれました。すると、会場はしいんとしずまりかえって、しばらくすると、ざわざわとみんなは騒ぎだしました。

「おい、あの人、たいへんな美人だぞ。」

「ねえ、あの人、たいへんな美人じゃないかしら。」

王様は、もうお年でしたが、それでもシンデレラの美しさには、びっくりしてしまいました。王子様は、一緒にダンスをしましょう、と手をひいてシンデレラをフロアに連れていきました。

シンデレラがこうして、パーティを楽しんでいるうちに、11時45分の鐘がなりました。シンデレラは慌てて、会場をあとにしました。

家にかえると、シンデレラは急いで、乳母を探しました。そして、お礼をいいました。あともう一つ、シンデレラには言わなければならないことがありました。明日も、ダンス・パーティに行きたい、ということです。というのも、王子様が、明日もぜひきてください、といってくれたからです。

翌日、シンデレラは昨日のパーティのときより、もっとおめかししていきました。王子様はずっとシンデレラのそばにいて、いつも優しい言葉をささやいてくれました。あまりにも楽しかったものですから、シンデレラは時間のことなんて、すっかり忘れていました。するとどうでしょう、12時の鐘がなっているではありませんか。シンデレラはびっくりしてとびあがり、急いで会場をあとにしました。王子様は一生懸命追いかけてきましたが、シンデレラはもう行ってしまった後でした。けれど、シンデレラのガラスのくつが、片方残っていました。王子様はそっとくつをひろいあげました。シンデレラは息をきらしながら、なんとか家へかえりました。服はすっかりもとのボロにもどっていて、きれいだった馬車や服などはないありません。ただ、お城で落としたガラスのくつのもう一方だけが、残っていました。

何日かたった日のこと、トランペットがなって、王子様のことで、おふれがありました。なんと、ひろったガラスのくつが、ぴったり足に入る女性を、王子様の花嫁にするというではありませんか。王子様にいわれたお役人は、いろいろなお姫さまに、そのくつをはいてもらいましたが、ぴったり入る人は、だれもいませんでした。

くつはまわりまわって、シンデレラの家にもやってきました。姉たちはなんとかしてくつに足をおしこもうとしましたが、どうにもこうにもなりません。シンデレラはいいました。「わたしにも、あわないかどうかだけ、やらせてもらえませんか？」姉たちはぶつとふきだして、シンデレラをからかいました。でも、くつの持主を探しているお役人は、シンデレラをじっと見つめました。お役人は、シンデレラがとても美しい顔をしていると、気づいたのです。そこでお役人は、こういいました。はいてごらんささい、誰にも試してみよ、といわれておりますので、と。

お役人が、シンデレラをイスに座らせ、足にくつをあてがうと、シンデレラの足に、ぴったり入ったのです。二人の姉は、びっくりして、何も言葉が出てきませんでした。でも、次の瞬間、もっとびっくりしました。シンデレラが、ポケットからもう片方のガラスのくつをとりだして、自分の足にはめたからです。そこへ乳母がやってきて、シンデレラのボロをステッキでちゃんとたたきました。シンデレラの服は、みるみるうちに、前よりもっときれいな服に変わってしまいました。さすがに二人も、ダンス・パーティで見たきれいなお姫さまが、シンデレラだったことに気がつきました。二人はシンデレラに、今までひどいことをたくさんしましたが、どうか許してください、とお願いしました。シンデレラは二人の顔をあげさせて、ぎゅっとだきしめ、こういいました。「いいんです、ほんとうに、いいんです。ただ、わたしをいつも好きでいてくれたら、それだけでいいんです。」

シンデレラはその姿のまま、王子様の前へ案内されました。王子様は、今日のシンデレラが、今までの中で一番美しい、と思いました。

数日後、シンデレラと王子様は結婚式をあげましたとさ。

シンデレラのストーリーは著者によってどのように違うのか

I. 作品について

『シンデレラ』(Cinderella)は、童話の一つで、その主人公である。『灰かぶり姫』・『灰かぶり』・『サンドリヨン』ともいう。グリム兄弟によるもの、シャルル・ペロー(Charles Perrault,1628-1703)によるものが知られているが、より古い形態を残していると考えられている作品としてジャンパティスタ・バジレの『ペンタメローネ』に採録された「灰かぶり猫」が挙げられる。中国にも楊貴妃がモデルと言われる「掃灰娘」という類話があるなど、古くから広い地域に伝わる民間伝承である。日本ではペロー版が有名である。児童向け作品として絵本・アニメなど様々な形で公表されている。なお、英語: cinder、フランス語: cendre、ドイツ語: Asche、イタリア語: cenere などはいずれも「燃え殻」「灰」を意味し、各作品名はこれらの派生形である。和訳名の『灰かぶり姫』もこれらを汲んだものである。

II. ペローの描くシンデレラ

ガラスの靴を履かせ、カボチャの馬車に乗せるというモチーフを付け加えたのが、フランスの文学者シャルル・ペローであるといわれている。

III. グリム童話の中のシンデレラ

グリム童話はペローの影響を強く受けているといわれるが、この物語に関してはペローのものよりも原話により近いのではないかとされている。ペローとの違いとして主に1、魔法使いが登場しない(当然カボチャの馬車も登場せず、代わりに白鳩が主人公を助ける)。2、美しいドレスと靴を持ってくるのは、母親の墓のそばに生えたハシバミの木にくる白い小鳥。3、ガラスの靴ではなく、一晩目は銀、二晩目は金の靴である。4、シンデレラが靴を階段に残したのは偶然脱げたのではなく、王子があらかじめピッチを塗って靴が絡め取られたから。5、王子が靴を手がかりにシンデレラを捜す際、連れ子の姉たちは靴に合わせる為にナイフで足(長女が爪先、次女は踵)を切り落とす。しかしストッキングに血が滲んで見抜かれる。6、物語の終わり、シンデレラの結婚式で姉二人はへつらつて両脇に座るが、シンデレラの両肩に止まった白鳩に復讐としてチェスト(目潰し)されたところで物語が終わる。などが挙げられる。

IV. バジレの描くシンデレラ

ペローやグリムよりも以前の17世紀の南イタリアで書かれた『灰かぶり猫』は、ペローやグリムよりも古い形と考えられ、両者と異なる部分がある。主人公のゼゾッラ(シンデレラにあたる)と継母(当初は裁縫の先生)は実は同志で、ゼゾッラと不仲であった最初の継母を殺害して、継母と父の大公を再婚させるが、後に継母が6人の実娘を迎えるとゼゾッラを裏切って冷遇する。その後、父の大公が旅行中に継母の娘には豪華なお土産の約束をするが、ゼゾッラはただ妖精の鳩がくれる物が欲しいとだけ答え、その後大公が妖精から授かったナツメの木の苗を土産として与えられたゼゾッラはその木を大切に育てる。ナツメの木は実は魔法の木で彼女は木の魔法によって綺麗に着飾ってお祭りに参加して国王の注目を集める。国王の従者に追いかけられたゼゾッラは履いていたピアネッレ(17世紀のイタリアで履かれていた木靴)を落としてしまう。斎日に国王が国中全ての娘を召しだして靴を履かせた結果、ゼゾッラだけが靴に合致して王妃に迎えられる。継母の6人の娘はその時の屈辱を母親に伝えたところで幕が閉じる。バジレの作品の最大の特徴は最初にゼゾッラ(シンデレラ)が最初の継母を衣装箱に挟んで首を折って殺害する場面があることである。このシーンはグリム童話の1つである「ねずの木」と共通する側面を有している。

このように、著者によってシンデレラのストーリーは大きく違っている。さまざまなシンデレラストーリーを読み比べてみるのもよいだろう。

(やまぐち・ゆか：欧米言語文化講座 英語圏)

A.A.ミルン『クマのプーさん』(プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし)

:愛される「お婆かさん」

大沢麻友

A.A.ミルン『クマのプーさん』(プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし)

ある日、クマのプーは、ほかに、なにもすることがないので、なにかしようと思いました。コブタは、なにをしているか、みてこようとおもって、コブタの家に出かけました。しかし、コブタは家にいませんでした。それでも、まず、プーは、ねんのために、どんどんと、戸をたたいてみることにし……そうやって、コブタのへんじのないのをまつあいだ、からだか、あたたかくなるように、とんだりはねたりしました。すると、きゅうに、うたがひとつ、あたまにうかんだのです、「げんきにひとにきかすうた」とでもいいたいような、いいうたが。

ゆきやこんこん ぽこぽん
あられやこんこん ぽこぽん
ふればふるほど ぽこぽん
ゆきやふりつもる ぽこぽん
それでもぼくの ぽこぽん
それでもぼくの ぽこぽん
つめたい このあし ぽこぽん
ああ だれがしろ ぽこぽん

「ぼくは、こうするんだ。まず家にかえって、いま、なん時だかみる。それから、くびまきでもひっかけて、イーヨーのところへ出かけて、このうたうたってやるんだ。」

あまりむちゅうで、かんがえながらいったものですから、とつぜん、目のまえに、じぶんのいちばんじょうとうのいすに、こしかけこんでいるコブタをはっけんしたときには、とてもびっくりしました。そして、あたまをかきながら、いったい、ここは、だれの家なんだろうか、とかんがえこんでしまったのです。

「きみ、出かけてるのかとおもったよ。」

「ちがうよ、プー。出かけてたのは、きみさ。」

それから、プーは、何週間かまえから、十一時五分まえでとまっているとけいのみあげました。

「プー。ぼく、ちょっと、こうしたら、どうかとおもったんだ。つまりね、いまは、家にかえって、きみのうたをれんしゅうして、それから、イーヨーにあったとき、それ、うたってやっちゃ、どんなもんだろ？」

「だけど、れんしゅうしに家にかえるなんて、つまらないよ。だって、これは、とくに、ゆきのなかでうたう『そとあるきのうた』なんだもの。」

ふたりは、イーヨーのすんでいる「イーヨーのしめっ地」にやってきました。

「ぼく、かんがえたんだけど、だって、ほら、かわいそうに、イーヨーは、すむとこがないじゃないか。コブタ、きみには、家があるだろ？ぼくだって、家はもってる。だからさ、

ぼく、イーヨーに家をたててやろうじゃないかって、かんがえたんだ。」

「すばらしいかんがえだ。このまつ林のむこうがわに、ぼうが、山もりあるよ。ぼく、みたんだ。うんとこさと、あるんだ、つみあげて。」

いっぽう、クリストファー・ロビンは、そのあさ、家で、アフリカまで行って、かえってくるあそびをしていました。そこへ、やってきたのが、イーヨーでした。

「わしは、わしのちいさな森のわきに、家をたてましたのさ。ところが、わしが、けさ、出かけるときには、あった家が、かえったら、なかったんですわい。」

そこで、ふたりは、まつ林のわきの原っぱのすみの、イーヨーの家が、もうなくなっている場所までやってきました。

「そうれね。ぼうきれ一本のこらず！」

「ほら、きこえるだろ？プーだ！それから、コブタと！」

「家ができたよ！」と、ふとい声が、うたいました。

「ぽこぽん！」と、きいろい声が、うたいました。

クリストファー・ロビンが、イーヨーの家がなくなったという、かなしいできごとについて、はなしました。

「その家どこにあったんです？」

「ここに。」

「ぼうで、できてたんですか？」

「そうじゃ。」

「あれ！」

「ずっとあったかいんです。まつ林のあっちがわの、イーヨーの家のあるほうが。」

そして、みんなで、かどを、ぐるっとまわっていってみると、そこに、とてもすみやすそうな、イーヨーの家があったのです。

「ふしぎはんぜん。わしの家じゃ。わしは、わしが、たてたといったところにたてたんじやから、ここまで、かぜにふきとばされたにちがいない。」

イーヨーをそこへのこして、三人はかえりました。

そして、クリストファー・ロビンが、さんざんわらってしまうと、三人は声をそろえて「そとあるきのうた」を、うたいました。

愛される「おばかさん」

I. 作家と作品について

A.A.ミルンとは、正式にはアラン・アレクサンダー・ミルン (Alan Alexander Milne, 1882-1956) というイギリスの作家である。代表作は、『クマのプーさん』であるが、児童文学作品のほかにも推理小説など多くの作品を著している。また、『クマのプーさん』の英語名は"Winnie-the-Pooh"であり、その題は、彼の息子のテディベアのWinnipegと、ミルン親子が見た白鳥のPoohからヒントを得て名づけられた。また、登場人物のクリストファー・ロビンは、彼の息子であるクリストファー・ロビン・ミルンがモデルとなっており、その他のキャラクターも、クリストファーのテディベアがモデルとなっているものが多い。

II. 挿絵について

『クマのプーさん』の挿絵はE.H.シェパードによるものである。『クマのプーさん』を原作として作られたディズニーアニメの『くまのプーさん』の方が私たちには見慣れているため、原作の方が目新しい感じがしてしまうが、素朴でほのぼのとした様子が非常にかわいらしい。また、主な違いとしては、原作では服を着ていないプーがディズニーでは着ていたり、緑の服を着ているコブタ (ピグレット) がディズニーではピンクの服をきていたり…というようなものである。

III. 作品が愛される理由

今や、この作品を知らない人はほとんどいないだろう。これほどまでに広く、長く愛される理由は、キャラクターたちのやりとりがおもしろく、また、その微笑ましい様子に読者の心が和むからだろう。ディズニーアニメでクリストファー・ロビンがプーに対して「プーのおばかさん」と言うシーンをよく見るが、プーは本当に「おばかさん」なのである。今回紹介した「プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし」でも、プーは他のことを考えすぎて自分の家をコブタの家と勘違いしてしまったのである。今回は登場していないものもいるが、他のキャラクターも基本的にはプーのように「おばかさん」な性格のものが多く、やりとりにズレが生じていることもしばしばある。しかし、それでもキャラクターたちはいつも一生懸命で、何事も本気で考え、行動している。そこに愛らしさを感じる。

IV. 『クマのプーさん』のススメ

『クマのプーさん』は大人でも子どもでも楽しめる作品であるが、私は、むしろ心にゆとりのない大人に読んでもらいたいと思う。この作品を読めば、きっと緊張感もほぐれ、穏やかな気持ちになることができるだろう。誰もが知る作品であるからこそ、一度原作を読んでおくのもよいのでは。

参考文献

『絵本 クマのプーさん』ぶんA.A.ミルン えE.H.シェパード やく石井桃子 岩波書店

(おおさわ・まゆ：幼稚園教員養成課程)

C. S. ルイス 『ライオンと魔女』

: 勇気と裏切らない心

藤原涼子

C. S. ルイス 『ライオンと魔女』

時は第二次世界大戦。ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシィの4人兄弟は、空襲を避けてロンドンから片田舎にあるお屋敷に疎開しました。

そしてある雨の日、末っ子のルーシィがあるがらんとした部屋にあるタンスの奥へと進んでいくと、雪の降る真夜中の森に出てしまいました。そして目の前には腰から上は人間で、体はやぎのフォーンがいました。フォーンはタムナスと名乗りここがナルニアという国だと教えてくれました。そしてルーシィは、ナルニアを支配するとんでもなく恐ろしい“白い魔女”の話の話を聞きました。

元の空き部屋に戻ったルーシィは、他の3人に今見てきたことを興奮しながら話しました。しかし誰にも信じてもらえない上に、さっきまでナルニアに通じていたはずの所はただのたんすの板になっていました。

数日後、エドモンドがなんの気なしに例のたんすの中にかくれどンドン奥に進むと、その内雪の降る森の中に出てしまいました。「ルーの言っていたことは本当だったんだ！」そう思ったとき、鈴の音と共に、美しくもつめたい表情をした女の人の乗ったそりがエドモンドの前で止まりました。

その女の人は、自らを“女王”だと名乗りました。そしてエドモンドがアダムの息子だと分かったと急に声色を変え、エドモンドに好物のプリンをたくさん与えました。女王によって、魔法をかけられたプリンを食べたエドモンドは、いつの間にか兄と姉と妹がいること、妹はすでにナルニアにきたことがあり、その時フォーンに会ったことなどを全て話してしまいました。プリンをもっともっとと欲しがるとエドモンドに魔女は、「次は兄弟を連れてあの二つの山の間に我が館にきなさい。そうすれば、プリンをもっとやるだけでなくそちを王子にしてやろう。ただし、今のことは兄弟には絶対言ってはならないからね。」と、エドモンドをうまく言いくるめたのでした。

そしてまた数日後、子どもたちはたまたまたたんすの中に入りました。次第に4人はたんすの中が寒いことや自分たちが木にもたれていたことに気が付きました。そうしていつの間にかナルニアにたどり着いた4人は、ルーシィの案内でタムナスさんの家へと向かいました。ところが驚くことにタムナスさんの家は、めちゃめちゃに壊れていたのです。どうやら、魔女によって連行されたようです。「タムナスさんを助けたいけどどうしたらいいのかしら…」と困っている時に、タムナスさんの知り合いのビーバーと出会いました。そして4人にこう言いました。「アスランが動き始めた噂です。もうこのナルニアに上陸した頃でしょう。」アスランがどういう人か子どもたちは知りませんでした。みんなその言葉に不思議な感じを受けたのでした。

素敵な食事が終わり、子どもたちはビーバーにアスランのことを尋ねました。アスランは

ナルニアの王で、古い言い伝えでアスランが来れば悪い時代は終わると言われており、とうとうナルニアに戻ってきたとのことなのでした。また、悪い時代がおわるには4人の人間がケア・パラベル王座に就くことが必要だという古い言い伝えも教えてくれました。そして、そのアスランと子どもたちが会えるよう自分が石舞台に案内するとピーターは言いました。そこでピーターが魔女と自分たちの関係を尋ねると、2人のアダムの息子と2人のイヴの娘がケア・パラベルの王座に就くと、白い魔女の時代が終わるだけでは魔女の命までもが終わるということを教えてくれました。その時ルーシィが、エドモンドがいないことに気づきました。実はエドモンドは、アスランと自分たちが石舞台で会うところまで聞いてそっと家から出て行き、ふりしきる雪の中、女王の城へと歩いていったのでした。女王に今さっき聞いた話を順にしていますが、アスランと石舞台で会う話のところまで女王は表情を変え、急いで石舞台に向かう準備をするよう小人に命じました。

ここで今度はピーター夫婦と3人の子どもたちの方に話を戻します、一同は石舞台に向けて出発しました。何時間か歩き、仮眠をとっていた時、突然鈴の音が聞こえました。全員が魔女のそりの鈴の音だと思いましたが、その鈴の音はなんと、サンタのそりの音だったのです！魔女の魔法でクリスマスが来なくなっていたナルニアにクリスマスがやってきたのです！サンタはピーターに1個の盾と1振りの剣を与えました。スーザンには1張りの弓、矢でいっぱい矢筒、小さな象牙の笛を与えました。ルーシィには、どんなけがでも治る薬の入った瓶と、1振りの短剣を与えました。そしてサンタはたちまちどこかにいってしまいました。一同も再び立ち上がり、出発しました。そして一同は、魔女の魔法のどこかに狂いが来たと感じていました。日が落ち花々は閉じようとし始めた頃、ようやく石舞台へとたどり着いたのでした。石舞台は原の真ん中にあり、奇妙な線や形が至る所に刻まれた大きく頑丈な一枚岩でした。そしてその原の片隅には素敵なテントが張られていました。一同がふと右手を見ると、そこにはたくさんの動物に囲まれたライオン——。アスランが立っていました。子どもたちはアスランの顔を見ようとしましたが、その威厳のある王者の目をちらりと仰ぎ見るだけで精一杯でした。怖じ気づきながらも、ピーター、スーザン、ルーシィの順に挨拶をし、エドモンドが魔女の味方についてしまったことを話しました。アスランとピーターが2人で話をしていると、だしぬけにスーザンの角笛がなったのでした。急いでテントに駆けつけると、魔女の手下のオオカミがスーザンに襲いかかろうとしているではありませんか！ピーターは死に物狂いでオオカミに剣をふるい、なんとかその獣を倒しました。

今度はエドモンドの方に話を変えなければなりません。エドモンドは歩いて歩いてこれ以上歩けないほど歩かされました。するとどこからか蹄のとどろきなどが聞こえてき、あっという間にエドモンドの周りは恐ろしい騒ぎになりました。そのうちにエドモンドはアスランの送った救助隊に助けられ、共に石舞台に戻ることになりました。しかし残念なことに魔女はまだ捕まっていないのでした。次の朝、エドモンドは3人の兄弟と仲直りしました。その後魔女がやってきて、一同に古くナルニアが出来た頃に下された"もとの魔法"の話をし出し、それに則りエドモンドをよこせと言いました。するとアスランが「皆の者、下がってくれ。」と言い、魔女と2人でひそひそ話し始めました。しばらくたってアスランが「話が着き、エドモンドをよこせというのをやめてくれた。」と言い、話し合いの結末を待っていた全ての者が息を吹き出し安堵した。そして魔女はそそくさと帰って行きました。

魔女が逃げていくとすぐに一同は、ベルナの渡り場へと移動しました。夜になり、スーザンとルーシィはテントの外へと出ました。するとちょうどアスランが森の中に入って行く所でした。何も言わず、2人は後をつけましたが、広い草原を通過しているとき、2人はアスランに見つかってしまいました。アスランは途中までならとついてくることを許してくれました。そして石舞台の少し前の所に来たとき、「何が起こっても決して姿を見せてはいけな

いよ。」と言って、行ってしまいました。それからの2人が見たことはこうだったのです。鬼やおオカミ、たくさんの妖怪といった魔女の味方がアスランを取り囲み、手足をくくり、アスランの美しいたてがみを切ってしまいました。そして魔女が石で出来たナイフを持って、アスランに近づいてきました。そして震える声でこう言いました。「では約束通りあの子の代わりに貴様を殺してやろう。死ね。」子どもたちは見るに堪えず、殺されるところは見ませんでした。

魔女たちがどこかへ行き、2人が声を立てて泣いていたその時。ガラガラバーン！！と言う大きな音がしました。見ると、そこにアスランが立っているではありませんか！その復活は、なんの裏切りもない者が進んでいけにえになるとその死は振り出しに戻るという掟によるものでした。驚きながら喜び、3人は女王の城へと向かいました。女王の城には女王によって石にされた人々でいっぱいでした。アスランがその人たちを順に元に戻していきました。そしてアスラン、スーザン、ルーシィ、助けられた人々は戦いに向かいました。

戦いはアスランたちが着いてすぐに終わりました。エドモンドが魔女の杖を勇気を持って壊したことが大きな勝因でした。そして4人はケア・パラベルの4つの王座に就き、ナルニアは「ピーター王、スーザン女王、エドモンド王、ルーシィ女王ばんざい！！」ばんざいの声の嵐でした。こうして4人は長い時をナルニアで過ごし、王として真っ当な仕事をこなしていきました。そんなある日、白しかをおっていた4人はある茂みの中へと吸い込まれるように足を進めて行ったのでした。そして次の瞬間！なんと衣装ダンスの中からからっぽの部屋に躍り出ていたのでした。しかも、一同が衣装ダンスに隠れた同じ日同じ時間なのでした――。

さてこれで衣装ダンスの冒険のお話はおしまいです。けれどもこのナルニアの冒険は、ようやく始まったばかりなのです。

勇気と裏切らない心

I. 作者について

作者C.S.ルイスは、1898年に生まれ、1963年に亡くなりました。彼は大学教授、文学研究家、批評家、詩人、作家、キリスト教弁証家、といった色々な能力を持った人でした。また、彼が書いた本も単行本になっているものだけで60冊を超えているのです。彼は小さい頃から3才年上のお兄さんであるウォレンと一緒に「ボクセン」(Boxen)という仮想の国を作って遊んでおり、父親の勧めで家の至る所にあった本を読み、読書の習慣がついたことが結果的に彼に物語を書かせることになったようです。

II. 作品について

『ナルニア国物語』は、C.S.ルイスが子ども向けに書いた最初で最後のおはなしです。出版の順序と物語内の年代との順序は関係なく、全部で7作品に及びました。

III. 勇気と裏切らない心

この話を読んでもっとも強く感じたことは、勇気の持つ力の大きさです。そもそも4人がナルニアに入り込んでしまった時、そのまま元の世界に帰ることも可能でした。しかし4人がそのまま進んでいくことを決めたため、ナルニアは救われ、4人もたくさんのことを学ぶことが出来ました。また、裏切られた時、もう一度その人のことを信じるのはたやすいことではありません。そのため、一度は魔女の味方についてしまったエドモンドを許すことも、勇気のいることだったのではないかと感じました。

勇気と共に深く感じたことは、裏切らない心です。アスランが多くの人々に慕われているのは、周りの人を裏切らないからだと思います。その証拠にエドモンドをすくいだすことが出来ました。

どんなに卑劣な人がいても立ち向かい、裏切らずに生きていく、そんな人生を過ごしていきたいと思いました。

(ふじわら・りょうこ：幼稚園教員養成課程)

シャルル・ペロー「長靴をはいたねこ」

：西洋で生まれた児童文学

坂口 碧

シャルル・ペロー「長靴をはいたねこ」

昔、あるところに、粉ひきが三人の息子と暮らしていた。この親子は貧乏だった。粉ひきが死んだ後に残されたものといえば、粉ひき小屋と、ろばと、ねこだけだった。一番上の息子は粉ひき小屋を、その次の息子はろばをもらった。末の息子がもらったものは最後に残ったねこだけだった。

「兄さんたちはいいなあ。粉ひき小屋とろばさえあれば、二人で働いて暮らしていける。でも僕がもらったのはこのねこ一匹。どうやって暮らしていけばいいんだろう…」すると、ねこは主人の話を聞いてこう言った。

「なあに、がっかりすることなんかありませんよ。ご主人さま、ぼくに袋とやぶの中を歩き回る長靴をください。そうしたら今にきっと、ぼくをもらってよかったと思う日がくるでしょう。」

さて、主人から頼んだものをもらうと、ねこはさっそく長靴をはき、袋を首にかけ、原っぱへと出かけていった。原っぱにはうさぎがたくさん遊んでいた。ねこは、袋の中にうさぎの好きなえさを入れ、そのすぐ傍でじっと死んだふりをし、袋に飛び込んできたうさぎをさっと絞め殺した。ねこは、さっそく王様の御殿へ出向き、王様にお会いしたいと頼みにいった。部屋へ通されると、ねこは丁寧にお辞儀をして言った。

「王さま、わたしの主人のカラバ公爵さまが捕まえたうさぎです。どうぞお受け取りください。」

ねこは主人に、カラバ公爵なんていう立派な名前をつけてしまっていた。それからというもの、ねこはうさぎだけでなく、しゃこなどの獲物を捕まえては王様の所へ届けた。王様は喜んで受け取り、ねこにはお駄賃まで与えた。

ある日、ねこはこんなことを聞いた。なんでも王様が美しい王女と馬車に乗って、近くの川べりへ遊びに出かけるのだという。

「ご主人さま、ご主人さま！今からぼくの言う通りにするんですよ。すぐにあの川へ行って、水浴びをしてみてください。あとは、ぼくが上手くやりますから。」

突然のことにカラバ公爵は訳が分からなかったが、ねこの言う通り、川へ行って水浴びをすることにした。そこへ、王様の馬車がやってきた。ねこは主人の服を見えないところへやると、大声で叫んだ。

「助けて、助けて！カラバ公爵さまがおぼれちゃう！」

叫び声を聞いて、馬車の窓から顔を出した王様の目に映ったのは、何度も獲物を届けに来た、あのねこだった。すぐさま王様は、家来を呼んで、カラバ公爵を助けるよう指示した。

ねこは、馬車のそばへ近寄ると、王様にこう言った。

「王さま、王さま！大変です！公爵さまがここで水浴びをしていると、何者かが服をみんな盗んでいってしまったんです！」

王様はすぐさま家来に服を持ってこさせた。王様からもらった服を着ると、公爵は見違えるほど立派に見えた。そんな公爵を一目見て、王女は公爵を気に入ってしまった。

「公爵、そなたも一緒に馬車に乗って、一回りしてみないか。」

王様に誘われ、馬車に乗る公爵。その様子にねこは大喜び。ねこは、馬車の先回りをして、どんどん走っていった。その先には、百姓たちが牧場で草刈りをしていた。ねこは、世にも恐ろしい声でこう言った。

「おい、王さまに聞かれたら、この牧場はカラバ公爵さまのものだと言うんだぞ。そう言わないと八つ裂きにしまおうぞ！」

まもなく、王様が牧場を通りかかった。

「この牧場は、いったい誰のものなのだ。」

「カラバ公爵様のものでございます。」

ねこに脅された百姓たちは、声を揃えて答えた。ねこはどんどん先回りし、行く先々で広い土地を見つけては同じように人々を脅していった。走っていくうちに、ねこは立派な城に辿り着いた。その城には、人食いの大男が住んでいた。なんと、今まで通ってきた土地はみんな、この大男のものだったのだ。

「ごめんください。通りがかりの者ですが、殿さまにぜひご挨拶がしたいと思います。お目にかかせていただくと、嬉しいのですが。」

人食いの大男は、ねこを迎え入れ、一休みしていくように、と言った。この大男がどんなやつで、どんな魔法が使えるのかねこは調べていた。

「殿さま、あなたはどんな動物にでも化けられるという噂がありますが、本当になれるのでしょうか。あなたのような大きな方が、まさか、ねずみのような小さな動物なんかにはなれないでしょうね。」

「何、なれないだって？この俺が出来ないことなどこの世にない。よし、見ている。」

そう言ったかと思うと、大男は小さな子ねずみに変身して床の上をちよろちよろと走っていた。一瞬のうちに、ねこはねずみに飛びかかり、パクッと食べてしまった。

しばらくして、王様の馬車が城に到着した。

「王さま、ようこそいらっしゃいました。ここがカラバ公爵さまのお城でございます。」

王様は、公爵が大変な金持ちであることが分かり、王女も公爵のことを大変気に入っている様子なのを見て、立派な婿を見つけたものだ、すっかりご機嫌になっていた。そして、その日のうちに公爵と王女は素晴らしい結婚式を挙げ、幸せに暮らした。

さて、頭のいい、あのねこはそれからどうなったのかというと、偉い貴族になり、遊びでしかねずみを追い回すことがなくなったという…

西洋で生まれた児童文学

I. 作者について

シャルル・ペロー (Charles Perrault 1628~1703) は、フランス童話の生みの親として、世界中の人々からよく知られている作家である。一方で、オルレアン大学で法学を学び、弁護として活躍する傍ら、17世紀後半のフランスの政治や文学の分野において、非常に重要な役割を果たした人物でもあった。17世紀のフランスは、ルイ14世が国を治めるようになってから国力が増大し、宮廷文化や文芸が発展した時代だった。ペローは、当時の権力者コルベールから目をかけられ、アカデミー・フランセーズの会員に選ばれ、王室建築総監に任命された。ペローがこのように出世していったのには、生まれつき活動家で、機敏だったことが高く評価された要因ではないかと言われている。退官してからも、ペローは「新旧論争」という文学史の上で非常に有名な事件で大活躍をした。これは、古代と近代とどちらが優れているかについての論争であるが、ペローは「近代の方が優れている」ということを主張するために、昔話の中でわざとルイ14世の宮廷の描写を近代の象徴として織り交ぜ、その優位性を誇張したのではないかとされている。

II. 児童文学の誕生

1697年、ペローは『寓意のある昔話』(Histoires ou contes du temps passe)という本を出版した。これは、民間伝承を詩の形にまとめ、教訓を加えたものだが、当時の風俗を反映させるなど子どもにも親しみやすく書かれており、子どもを意識して書かれた初めての児童文学であると言われている。「長靴をはいたねこ」はその中の1つとして収められている。そのほかにも、ディズニーで長編アニメーション化された「眠れる森の美女」や「シンデレラ」などもこの本に収められており、ペローの物語は、今も世界中の子どもたちに愛され続けている。

III. 靴と人との関係

日本人と欧米人とでは、「足」事情が異なっている。家の玄関で靴を脱ぐというのが日本の習慣であるのに対し、欧米ではみなベッドに入るまで靴を履いている。それは、欧米人にとって、靴を脱ぐという行為は裸になるということと同じようなことだと考えられているからである。それほど足元が重要視されていることが分かる。このような靴に対する考え方、生活習慣の違いを背景に、この物語を読んでいくことを勧める。きっと、たった一足の長靴をねこにあげた末の息子と、それをもらったねこことの信頼関係の深さが見えてくるのではないだろうか。

(さかぐち・みどり：欧米言語文化講座 英語圏)

ハンス・クリスチャン・アンデルセン『おやゆび姫』

: 児童文学の魅力

小川 陽 香

アンデルセン『おやゆび姫』

昔々あるところに、子どもが欲しくて欲しくてたまらない女の人がありました。どれだけ願っても願いが叶わなかったので、魔法使いのおばあさんに相談しました。するとおばあさんは「これを大事にお育て。」と言って特別な大麦の一粒を女の人に渡しました。

女の人それが家にもって帰って植えてみると、みるみるうちに大きくなって、真っ赤なチューリップが咲きました。よく見るとそこにはなんと小さな小さな女の子が座っていました。女の人はその子を「おやゆび姫」と名付け、大事に育てることにしました。

おやゆび姫は本当に小さいので、クルミのからの上に、すみれの花びらをシート、バラの花びらを敷き布団にして寝ることにしました。女の方は、おやゆび姫がいつでも遊べるようにとお皿に水を入れ、チューリップの花びらをボートにして置いておきました。お日様が大好きなおやゆび姫は、そのボートに乗って太陽の下で歌いながら遊ぶのがお気に入りでした。

ある日おやゆび姫が眠っていると、みにくいヒキガエルが一匹やってきました。ヒキガエルはかわいらしいおやゆび姫を自分の息子のお嫁さんにしようと、くるみのからごと連れ去ってしまいました。

ヒキガエルはおやゆび姫が寝ているクルミをハスの葉の上に置いて、息子とおやゆび姫の新しいおうちを作り始めました。そうしているとおやゆび姫が目を覚まして、見知らぬところに連れてこられていたので泣き出してしまいました。

近くにいたメダカたちがかわいそうなおやゆび姫を見て、みんなで力を合わせて助けることにしました。おやゆび姫が乗せられているハスの根元をガリガリとかじり始めたのです。ずっとかじっているとついにハスの葉が根元から切れて、おやゆび姫はハスの葉に乗ったまま川を流れていきました。

初めおやゆび姫は移り変わる景色を楽しんでいました。しかしそこに大きなコガネムシが飛んできて、おやゆび姫を連れ去ってしまいました。おやゆび姫はおびえて震えました。

コガネムシは

「かわいいな。コガネムシには見えないけどかわいいな。」

と言っておやゆび姫に花の蜜をとってきて食べさせました。しばらくすると他のコガネムシがたくさんやってきて

「この子変だ。触角がない。」

「体が細すぎるなあ。足が二本しかないし。」

と次々に言いました。今までかわいいと言っていた大きなコガネムシも、周りの意見を聞いているうちに、だんだんおやゆび姫のことをかわいいとは思わなくなってしまいました。そしておやゆび姫をヒナギクの上に置き去りにしてしまいました。おやゆび姫はコガネムシとお友達にもなれず置き去りにされてしまったことがとても悲しくて泣いてしまいました。

夏が終わり、秋が過ぎ、とうとう冬になってしまいました。おやゆび姫はいろんな葉っぱを使って雨や風をしのいでいましたが、冬の冷たい雪にはもう限界でした。

ある日どうしようもなくなっていて一人とぼとぼと麦畑を歩いていると、野ネズミのおうちにたどり着きました。そこに住んでいた野ネズミのおばあさんはおやゆび姫を見ると

「まあ、なんてかわいそうに。」

と言ってご飯を食べさせてくれました。

「この冬が終わるまでここにお住まいなさい。ただしおうちの仕事をちよいと手伝っておくれ。」

と野ネズミのおばあさんが言うてくれたので、おやゆび姫はおばあさんの家に泊まることにしました。

ある日おやゆび姫が言われた仕事をきちんとやっていると、近所に住むお金持ちのモグラがやってきました。野ネズミのおばあさんは、おやゆび姫にはぴったりのお婿さんなのですが、おやゆび姫には全くそんな気はありません。

モグラはつやつやのコートを着てめかしこんでやってきました。お家も大きくてとてもお金持ちなのです。でもおやゆび姫はモグラのことが好きではありませんでした。なぜならモグラはおやゆび姫が大好きな太陽やお花のよさを分かってくれないからです。

ところがモグラはというと、おやゆび姫の甘い歌声を聴いてからずっとおやゆび姫のことが好きでした。そこで、野ネズミの家から自分の家まで通路を作って、いつでもおやゆび姫が自分の家に来られるようにしました。

モグラと一緒に初めてその通路を通った時、途中でツバメが倒れていることに気づきました。前を歩いていたモグラは死んだ鳥を足で蹴ってよけました。でもおやゆび姫はツバメがかわいそうでならなかったので、モグラが帰ってからツバメの所に行ってなでてやりました。

その晩、おやゆび姫は眠れませんでした。ベッドから飛び出して干し草で毛布を作って、それをツバメの所に行って体にかけてやりました。「さようなら、かわいい小鳥さん。どんな日も楽しく歌ってくれてありがとう。」そう言うとおやゆび姫が帰ろうとした時、ツバメの体からドクンという音が聞こえました。ツバメの心臓の音でした。ツバメは死んでなどいなかったのです。おやゆび姫はペパーミントの葉を取ってきてツバメの頭にかけてやりました。

翌朝、おやゆび姫がツバメの様子を見に行くと、生きてはいるものの目を開けるのがやっとのようでした。おやゆび姫は冬の間中ツバメの世話をすることにしました。精一杯ツバメの世話をするうちに、おやゆび姫はツバメのことが好きになってしまいました。

あっという間に春が来て、ツバメもすっかり元気になり、おやゆび姫にお別れをすることになりました。

「僕と一緒にいきませんか？」

とツバメがおやゆび姫に聞きました。おやゆび姫はツバメのことが大好きでしたが、野ネズミを一人きりにすればとても悲しむにちがいないと思って、ツバメの誘いを断りました。

おやゆび姫はとても悲しみました。ツバメと一緒に緑の森に行けなただけではなく、これからずっと暖かいお日様の下に出ることがもうできません。モグラと本当に結婚することになったのです。おやゆび姫はモグラとは結婚したくないということを野ネズミに言いましたが、全く耳を貸してくれませんでした。

しばらくして結婚式の日取りも決まって、おやゆび姫がもう青空とはお別れだと思って空を見上げていると、あのツバメがやってきました。おやゆび姫はツバメにこれまでのいきつを全て話しました。

「それなら、僕と一緒に南の国へいきましょう。背中に乗ってください。」

ツバメがそう言うと、おやゆび姫は喜んでツバメの背中に乗りました。

ツバメはおやゆび姫を乗せて飛び立ちました。海を越え、山を越え、緑の国に着きました。空は青く澄んで、太陽の下でお花畑が輝いていました。

「僕の家じゃ君はくつろげないだろうから、好きなお花を選んで。その上におろしてあげるよ。」

とツバメは言いました。おやゆび姫は

「とってもうれしいわ。」

と言って大きな白いお花を選びました。ツバメがそのお花のところにおやゆび姫をおろすと、おやゆび姫はとてもびっくりしました。水晶のように透き通った、おやゆび姫と同じくらい小さい人達がお花の上に住んでいたのです。

彼らは花の妖精でした。その中の王子様がおやゆび姫を見つけて言いました。

「なんてお美しい方だ。私のお嫁さんになってくれませんか。全ての花のお妃様となってくれませんか。」

おやゆび姫にはその言葉が重みのあるものに思えました。ヒキガエルやモグラの言葉とは比べ物にならないものでした。おやゆび姫は

「はい。」

と返事をしました。

ツバメはお祝いの歌を一生懸命歌いました。でも本当は悲しかったのです。本当はおやゆび姫のことを愛していたので、決して別れたくはなかったのです。しかしツバメはまた南の国からデンマークへ戻らなければなりませんでした。「さようなら、さようなら。」ツバメはそう言いながら南の国を去りました。

ツバメはデンマークにある自分の巣へ戻りました。そこは童話を書くおじさんの住む家の屋根でした。ツバメは巣の中で歌を歌いました。それはおやゆび姫が生まれて幸せになるまでのお話の歌でした。

児童文学の魅力

I. 作家について

『おやゆび姫』の作者であるハンス・クリスチャン・アンデルセンは1805年、デンマークのオーデンセで生まれ、貧しい家庭に育った。1816年に父親が亡くなると、オペラ歌手になることを決め学校を中退し、コペンハーゲンに移った。幾度もの挫折を経験した後バレエ学校にも在籍した。デンマーク王や政治家のコリンの助力で大学まで行くことができた。

アンデルセンの童話作品はグリム兄弟の作品とは違って創作童話が多い。初期の作品では主人公が死ぬ結末を迎える物も少なくなく、若き日のアンデルセンが死ぬ以外に幸せになる術を持たない貧困層への嘆きと、それに対して無関心を装い続ける社会への嘆きを童話という媒体を通して訴え続けていた事が推察できる。

代表作品としては『おやゆび姫』の他に、『裸の王様』、『みにくいアヒルの子』、『人魚姫』、『マッチ売りの少女』などがある。

II. 児童文学という名の文学作品

アンデルセン童話もグリム童話も子どもの頃に親に読んでもらって、ものによっては明確に思い出せないのがあるものの、やはり深く印象に残っているものが多い。ただ小さい頃は聞いた話を素直に解釈するため、話の矛盾点に気づいたり現実的に考えて不可能だという判断を下したりはしない。ただ大人になって懐かしい童話を読み返してみるとおかしな点が多々見つかるものである。そしてまた不可解な点だけではなく、裏に隠された意味や登場人物の心情などを感じ取ることができるようになっていたので、改めて読んでみるというのは非常におもしろいものである。

おやゆび姫を読み直してみると、意外にも一番印象に残った部分は子どもの頃の記憶として思い出せなかったラストシーンだった。おそらく子どもの頃は、おやゆび姫が花の妖精の王子様と結婚したという時点でハッピーエンドとして解釈していたのだろう。しかしこの話では、ツバメがおやゆび姫のことを愛していたのに結ばれることができなかったというツバメの悲しみにも焦点をあてる必要があると思う。また、ヒキガエルのシーンも小さい頃は何も気に留めなかったが、集団心理の批判ともとることができるだろう。

このように「子ども向けのお話」の中にも大人が読むと新たな発見があって楽しめるものがたくさんある。児童文学とあなどらずに是非いろいろな作品を読んでもらいたいと思う。

(おがわ・はるか：欧米言語文化講座 英語圏)

フランツ・カフカ『変身』

:不思議な現実を読む

河津美代子

フランツ・カフカ『変身』

グレゴール・ザムザという青年は、両親がこしらえた借金を返済するため、セールスマンとして毎日休まず働いている、立派な青年でした。両親のためにお金を稼ぐだけでなく、可愛い妹が憧れの音楽学校に行けるようにと貯金もしている、優しい兄でもありました。

ある朝、グレゴールは胸騒ぎのする夢からさめると、ベッドの中にいる自分がとても大きな虫になってしまっていることに気がつきました。一体おれはどうなってしまったんだ、と彼は思いました。いま自分がいるのは確かに自分の部屋なのに、視界にうつる自分の体は褐色で、足もたくさんあります。硬い甲羅のせいでなかなか起き上がれない彼は、やがてベッドの中で自分の苦勞を振り返り始めました。こんな状況でも、思うのは仕事のことです。旅や出張が重なるうえに不規則な生活。．．しかし彼は いつか会社の社長を見返してやろう、親の借金返済を必ず成し遂げてみせよう、と強く思っていたのでした。

毎朝グレゴールが通勤に使う汽車は5時発です。しかし、時計を見ると、もう6時半ではありませんか。次の汽車に間に合ったとしても、社長の雷が落ちるのは当然、しかし彼は起き上がることが出来ません。5年の勤めの間に1度として休んだことはなかったのに、こんなことになってしまったら、社長は両親に向かって怠け者の息子のことを責めるのだらう。そう考えていると、部屋の外から母親の声がしました。「グレゴールや、出かけないのかい？」彼はきちんと説明したいけれども、声を出そうとするとひいひい言っとうまく話せません。なんとか「はい、はい、もう起きてますよ。」とだけ言えたけれども、その一寸の問答のおかげで父や妹まで彼の心配をし始めました。「グレゴール、一体どうした？」「兄さん、どこか悪いの？」彼は毎日部屋に鍵をかけて眠っているので、誰も部屋に入ることが出来ません。その自分の習慣を今更ながらに有難いと思いながら、なんとか自分の体を起こそうと、小さな足どもを動かしては試行錯誤していました。

その時、玄関口から物音がし、誰か来訪者があったかと思うと、それは、グレゴールの会社の支配人でした。仕事場に來ないグレゴールを愛に思っつゝわざわざ家まで訪ねてきたのでした。支配人はグレゴールの家族の前で彼の無断欠勤を非難し始めました。それを耳にしたグレゴールは我を忘れて、必死に、自分は今からでも仕事場に出向くことが出来るということを手早に訴えました。そうして彼は筆筒にもたれ掛かりながらなんとか立ち上がったのでした。

「たった一言でも分かりましたかね？我々をからかっつゝるわけじゃないでしょうな？」支配人はこう言いました。グレゴールは、やはり俺の言うことは皆には分からなくなってしまったのか？と思いながらドアのところまで行き、今頃密議が行われているであろう隣室の方に聞き耳を立てました。どうやら錠前屋を呼ぼうとしているのを聞きながら、彼は夢中になって鍵に噛り付き、そうしてようやく、鍵を開けることに成功したのでした。

扉の取っ手に頭を乗せて、倒れてしまわないようにそっと、グレゴールは自分の部屋の扉を開けました。部屋の扉の向こうから現れた者の姿を見て、まずは支配人が「おおっ！」と声をあげました。母親はその場にへたへたと崩れ、父親は両手で目を覆って泣き出しました。

いつもどおりの景色をしている家のなか、自分の軍隊時代の写真がかかっている壁のちょうど向かいに立っているグレゴールは、自分はたって平静を保っているといわんばかりに語り始めます。「すぐに着替えて、出かけます。」仕事への意欲も説得の言葉も、二言三言聞かないうちに、支配人はグレゴールから目を離さないまま玄関の方へ後退し始めました。このままではまずいと思ったグレゴールは四つんばいになって一事実これが立つよりも楽な姿勢であったのですが一小さな足を動かしながら、逃げるように走り去る支配人の後を追いましたが、父親によってそれは祖まれました。父親はステッキを手にして「しっ、しっ」と言いながらグレゴールを部屋の中へ追いやりました。父親のステッキから逃れようと必死に動いたためにドア付近で怪我をして血まみれになりながらも、彼は最終的に自分の元いた部屋に逃げ帰りました。

重苦しい眠りから覚めて、グレゴールは自分の部屋の中を這い出しました。優しい妹が彼の大好きなミルクを壺いっぱいに入れて置いておいてくれましたが、それを飲んでもちっともおいしいと感じないので、彼はたいそうがっかりしました。彼の部屋の扉は閉ざされていて、誰も入って来ようとしません。それどころか、今は外から鍵もかかっています。

長い夜をソファの下で過ごして朝がやってくると、妹が恐る恐るグレゴールの部屋の扉を開けました。ソファの下にいる彼を発見すると彼女は恐れている様子でしたが、置いておいたミルクがちっとも減っていないのを見て、彼女は部屋の外からグレゴールが食べられそうなものをゴっそり部屋の中に運んできました。新鮮な食物よりも、古い、腐りかけた様な食物の方が彼を惹きつけたことは、がっかりしたけれども、彼はそれらを涙さえ浮かべて食べ尽くしました。食事の後はグレゴールが急いでソファの下に戻り、その間に妹が食物の残骸を一緒に片付けます。このようにして彼は毎日食事をもらえるようになりました。

この生活が始まって1ヶ月が経とうとしても、扉にぴったり体を寄せて外の様子に耳を傾けると、家族の会話は殆どありませんでした。グレゴールがこのようなことになってしまったからすぐに、父親は家族に一家の財産とこれからの見通しについて話して聞かせました。以外に蓄えがあったことを知って彼は少し安堵しましたが、この財産は1年2年ほどで尽きってしまうだろうと思えました。一家が貧しくなってから、セールスマンとして必死に働き、家にお金をもたらしていたのは、グレゴールでした。そして彼は可愛い妹が音楽学校へ行けるようにお金を貯め、クリスマス頃にはその計画を発表してやろうかと密かに考えていたのです。そうした理念も、今の彼には何の役にも立ちません。グレゴールが働くようになってから父親はすっかり肥ってしまっていて働けず、母親は喘息病みで2日に1度は呼吸困難になります。そこで、次に働かなくてはならないのは、まだ17の小娘である妹ということになっています。それを考えると彼は悲しみで体が、火照ってくるのです。

グレゴールは革のソファの上で横になり、張革を何時間も搔きむしりながら過ごすことがしばしばでした。さもなければ椅子を窓際まで運んで行って窓の外を眺めているのですが、もう以前のように鮮明な景色は見えなくなって視界はぼやけてしまっています。ある時彼がいつもと同じく窓の外を眺めているとき、いつもより早い時間に部屋に入ってきた妹が、初めてグレゴールの今の姿を目の当たりにしたのです。その瞬間、彼女は後ろに飛び退いて扉をピシャンと閉めてしまったので、彼はすぐさまソファの下に身を隠しました。自分のこの姿を少しでも妹に見せまいとするには大変な我慢が必要なのだろうと思えました。

優しい妹と違い、両親はなかなかグレゴールの部屋に入ってこれませんでした。妹にグレ

ゴールのその日の様子を根掘り葉掘り聞くだけ聞いて、自分たちは部屋に入る勇気が出ません。特に父親と妹は母親をグレゴールの部屋に入れたがらず、引き止めていましたが、グレゴールはついに部屋の外で「どうしても行かせてください。可愛そうな私の息子なのだから。」と母親が父親と妹に向かって叫んでいるのを聞き、やはり妹よりも母が部屋に来てくれたほうが良いのでは、と感じたのでした。

1日中横になっているのも退屈であるし、とうとう食事も楽しみと言えなくなってきた頃、グレゴールは床だけでなく、壁も天井も這い回る、というのを新たな習慣にし始めました。彼が壁を這うとその跡が残るので、妹もすぐにそのことに気づき、彼が自由に這いまわれるようにと部屋の家具を全て外へ出す計画を立てました。妹一人ではとても家具を運び出せない所以她は母親に手伝ってもらうことにし、とうとう、母親がグレゴールの部屋の中へ入ってくるようになりました。母親は恐る恐る部屋に入ってきて、妹と共に家具を持ち出そうとしましたが、手を止めてこう言いました。「グレゴールが、家具を片付けちまって喜ぶものやら。それにこういうことをすると、あの子に関してすっかり諦めてしまったようじゃないか。あの子が元に戻った時、何も変わってないのが分かって、その分この期間のことだっただけですぐに忘れられるもんだよ。」これを聞いて、グレゴールは気づきました。俺は果たしてこの暖かい、親譲りの家具が並ぶこの部屋をあっさりと地獄へ変えてしまう気だったのか。家具というものが、たとえ這い回ることを妨げになろうと、それらを全て取り除くことはかえってマイナスなのだ！

ところが、妹の意見は母親とは反対でした。今まで2ヶ月ものあいだ兄の部屋に出入りし、世話をしてきたのは自分である、兄を一番わかっているのは自分である、と思っている様子です。グレゴールが自由に動き回るのには家具は邪魔であると主張するのでした。母親はそんな妹に反抗することはなく、女たちはまた、作業を始めました。作業が進んでいくにつれてグレゴールはいてもたってもいられず、彼女たちが隣室で休憩している間に、とっさにソファの下からまかり出ました。せめて部屋にかかった一枚の絵だけは、と思ってその絵のかかった壁にびったりへばりつきました。部屋に帰ってきた母親はその姿を見て叫び声をあげて倒れ、気を失ってしまいました。薬を探しに言って妹のあとを追って居間に出たグレゴールは妹まで驚かしてしまいました。妹は手に持っていた薬の瓶を落として割ってしまい、急いで居間を出て扉を閉めてしまいました。彼は自責の念に駆られ、壁や天井を這い回り始めました。全てがぐるぐる回り始め、とうとう彼は目を回してしまって、大きなテーブルの上にドスンと背中から墜落しました。

目が覚めると、ちょうど父親が帰ってくる頃でした。妹から事情を聞いた父親はグレゴールが何か悪いことをしでかしたように思った様子だったので、彼は急いで自分の部屋に戻ろうとしました。部屋の扉にもたれかかっていると、父親が近づいてきて、以前の父親からは想像も出来ない、しゃんとした様子でグレゴールの方へ向かってきます。父親が近づけば彼は逃げ出し、また立ち止まれば彼も立ち止まる、そんな堂々巡りで二人は部屋の中を動き回りました。たくさん足を動かして走り回っているうちにグレゴールは息切れし始め、頭も鈍感になって何も考えられなくなってきた頃、彼目掛けて何かが飛んできました。

林檎です。父親が彼目掛けて次から次へと林檎を投げ始めたのでした。その攻撃に彼は逃げ惑いましたが、ひとつの林檎が彼の背中に直撃し、めり込みました。彼は全身の力が抜けてしまって、その場に伸びてしまいました。その時、目が覚めた母親が何事かと思って部屋に入ってきました。母親は慌てふためいた様子で父親の方へ駆け寄り、グレゴールの命を助けてやって、と嘆願し、父親の攻撃は収まりました。

誰も林檎を取り除こうとはしてくれなかったため、グレゴールはその重症を1ヶ月以上も

患うことになってしまいました。そのせいで彼はおそらく永久的に行動の自由を失ってしまいましたが、家族が居間の扉を開くようになったので、わざわざ覗くようなことをしなくても彼は家族の姿を見ていることを許されたのです。居間では、母親が内職に謹み、店員として働き始めた妹は速記とフランス語の勉強をしています。父親は安楽椅子で居眠りをしていて、夜寝る時刻になってもなかなか寝室に行こうとしないので、いつも女二人の手を煩わせています。働き疲れてへとへとなこの家族の、一体誰がグレゴールの世話をしてくれると言うのでしょうか。今の状態でこの一家はぎりぎりなのでした。父親をやっと寝室へ移動させたあと、グレゴールの部屋の扉は再び閉じられます。暗闇の中で彼の背中への傷はまた疼き始めるのでした。

仕事の疲れからか、グレゴールのために食べ物を用意してくれたり部屋掃除をしてくれていた妹も、以前のようにしっかりと彼の世話をしなくなりました。しかし、グレゴールに嫌な顔ひとつしない手伝いのお婆さんが来てくれたので、世話がされなくなる心配はありませんでした。

この頃からグレゴールの部屋にはいらなくなったものが運び込まれるようになりました。というのも、住居の一室を3人の下宿人に貸したからなのでした。それからというもの、家族がこの下宿人に気を使いながら生活しているのを部屋から見つめることになりました。

ある日、いつものように下宿人達が食事を済ませ、ゆったり新聞を読んでいたとき、妹がヴァイオリンを弾いているのが聴こえてきました。下宿人達が居間で弾いてくれと頼んだので、グレゴールにも聴きやすくなりました。彼は久々に聴く妹のヴァイオリンの音色に弾かれ、気づけば部屋から出てしまっていました。妹はとても美しい演奏をしていましたが、下宿人達は飽き飽きといった雰囲気、煙草までふかし始めていました。グレゴールは段々と妹に近づいていき、そしてひとつの決心をしました。ここで弾いたって張り合いがない、妹のスカートの裾を引っ張って自分の部屋へ誘おう。そうしたらもう妹を部屋から出しはしない。

近づいてきたグレゴールに気づいた下宿人たちは皆即座に父親に説明を求めました。父親はなんとか下宿人の機嫌を損なわないよう試みていましたが、下宿人たちは部屋を解約することを宣言し、居間を出て行ったのでした。

妹の手からヴァイオリンがすると抜け、ばらんと音を立てて床に落ちました。グレゴールはその場にうずくまっていた。「私たち、こいつと手を切らなければだめ。」妹は言いました。「あれが兄さんだなんていう考えは捨てなくてはだめ。あれがいなくなるとちゃ。」家族は皆その言葉に同意している様子でした。グレゴールが回れ右をしてゆっくりと自分の部屋へ帰っていくと、妹によって扉はすぐさま閉じられました。

暗い部屋の中、今更になって、グレゴールは家族に対する愛情を思い起こしていました。自分が消えなければならない、という決意はもしかすると、妹の言っていたそれよりも揺るがぬ決意だったのかもしれませんが。体の痛みは徐々に薄らいで、やがて首がひとりでにがくと落ちて、鼻腔から最後の息が弱くかすかに流れ出ました。

翌朝、手伝いのお婆さんによってグレゴールの死は家族に伝えられました。家族は安心した様子で、彼の屍体を見つめていました。家族は仕事を休んでその日を休養に使おうと決めました。3人そろって郊外へ向かう電車に乗りながら、これからの生活について口々に語り合いました。この先、一家はまんざら悪くもなさそうだ、と思えました。そして3人の新しい生活が始まりました。

不思議な現実を読む

なにか物語を読んで、その感想文を書いた経験はあったが、物語を自分の文で語りなおす、というのは今までしたことがなく、とても新鮮だった。どう短くまとめてしまおうか、ここは多少長くなったとしても絶対に語らなければならない場面ではないか、どうすればスムーズに物語を伝えることが出来るか...そんなことを常に考えながら書いていたように思える。

特に私の選んだ、『変身』(原題: *Die Verwandlung*, Frantz Kafka [1883-1924 ドイツ]) という小説の持ち味は、不思議な物語を、特に不思議に感じさせずに語っていることだ。自分がこの小説を読んだときに感じたそのおかしな感覚を取り除いてしまったら、この物語は一気に面白みがなくなってしまうと感じた。不思議なことが起きているのにその原因がまったく分からない。解決方法も全くない。登場人物の心情が読み取れたりもしたので、全く同じように書くのではなく、少し短くしたり言葉を変えたりしてその雰囲気を変えないように心がけた。

ひとつの物語を、自分の言葉で語りなおすのは、また、新しい発見も与えてくれる。この人はこんな台詞を言っているが、本当はまったく反対のことを思っていたのではないかとか、この行動の裏にはこうした感情があったのではないかとといった具合で最初に読んだ時には思わなかったこと、気づかなかったことを考え直させてくれる。グレゴールはどうして虫になっても仕事のことばかり考え続けたのか? 彼の家族の気持ちはどうなっていたのか? そもそもカフカはなぜこのような物語を書いたのか? 捉え方は本当に様々であると思った。だが、自分が語りなおしただけでは、それを読んだ人々に私と同じ疑問はなかなか生まれ得ないだろうと思う。物語を、その印象のままに語る、というのは難しいことであると感じた。

また、そもそも自分がこの小説を選んだ理由についても考えてみた。昔の物語のなかには、冒険超大作や、推理小説もあるのに、どうしてこの短い、不可思議な内容の小説を選んだのか。それはやはり、初めて読んだときに受けた言いようのない不思議な印象が今でもずっと心に残っていたからではないだろうか。印象が大きかった物語ほど、他の人にも教えたいくなるものなのだ。

(かわづ・みよこ: 欧米言語文化講座 英語圏)

ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム作『ヘンゼルとグレーテル』

:ドイツ児童文学を考察して

楨納明衣

グリム兄弟『ヘンゼルとグレーテル』

ある深い森の奥に小さな小屋があった。しかし、その小屋は普通の小屋とは大きく違う事があった。そしてその小屋の中には何人もの少年と1人のおばあさんがいた。少年たちはみんな、顔は色白で体は丸々と太っており、とても健康そうに見えた。それはおばあさんが毎日少年たちに豪華でおいしい料理を食べさせてあげているからだ。一見その光景は幸せそうに見えるが、少年たちがこうしていられるのは少しの間だけで、いつかはおばあさんに外に連れて行かれて、その少年が帰ってくることは二度となかった。

ヘンゼルとグレーテルは2つ違いの兄妹で、父母と貧しいながらも幸せに暮らしていた。ところがある日実母が亡くなって、継母を迎えてから状況は一変した。継母は我が強く意地が悪く、ヘンゼルとグレーテルを邪険に扱った。もともと貧乏暮らしで食べ物に不自由していたが、村が大きな飢饉に襲われてからヘンゼルとグレーテルたちはより一層貧しくなった。そして食べ物に困った継母は父にこんな提案をした。

「翌朝4人で森に行きましょう。そして夜が更ける頃私たちだけ家に戻りましょう。すると2人は森をさまようことになって猛獣たちの餌食になるわ。」

父親は最初は反対したが、継母が父の元に嫁ぐとき何不自由させない、というのが約束だったため最後には継母の言うことに賛成した。このときヘンゼルはこのことを聞いていた。そして翌日4人は森に出かけた。出発の際ヘンゼルとグレーテルはわずかなパンを1かけらずつもらった。森の奥に進む間ヘンゼルはもらったパンを来た道に小さくちぎって落としていった。こうして帰り道をたどることができる、とヘンゼルは思った。しかし朝になりグレーテルと帰ろうとしたら、パン屑は全て小鳥たちが食べてしまっていた。2人はただひたすら森を歩いた。が、どれだけ歩いても家に帰れるどころかどんどん森の奥深くに歩いているような気がした。泣いているグレーテルを慰めながらヘンゼルはただ歩いた。

2人が空腹などにより体力の限界を感じて諦めかけたが、突然小さな小屋が現れた。そして2人はその小屋がお菓子出でできたものであると気付いた。グレーテルが夢中になってたくさんのお菓子を食べていると1人のおばあさんが出てき2人を家の中に招いてくれた。

最初は2人も大喜びだったがあとで牢獄に閉じ込められ、そこの少年たちと恐怖の日々をすごした。少年たちの間では、とてもいい感じに太ってきた少年から外の世界に連れ出され、おばあさんの手によって調理され食べられると噂されていた。

ある日大柄の男が牢獄にやってきて、全員をじっくりながめて1人のふくよかな少年を選んで、連れて行ってしまった。それ以来彼が帰ってくることはなかった。

グレーテルはほかの少年たちと違って牢獄の外でおばあさんの手伝いをしていた。その日もいつものように晩御飯の用意をしていたら、おばあさんと大男の会話が聞こえてきた。その内容は明日大男は町まで遣いに出るというものだった。それを聞いたグレーテルはみんな

の元に行き今聞いたことを話した。すると少年たちは、大男が留守ならおばあさん一人ぐらいなんとかなる、と言い出した。そしてその日がやってきた。計画通り牢獄内におばあさんを誘い、みんなで殴る蹴るを繰り返しおばあさんを捕らえることができた。ヘンゼルとグレーテルたちは外に出てたどり着いた修道院でおばあさん、大男の話をした。

おばあさんや大男は一体何をしていたのだろうか。実は連れて行かれた少年はおばあさんに食べられるのではなく、領主、ジル・ド・レのいるお城に連れて行かれ、ジルに犯された後むごく殺されるのであった。

修道院でこの話をしたためまもなく3人を含む城の者たちは逮捕に至った。逮捕され拷問にかけられ最後には3人とも処刑された。

こうして少年たちはみんなそれぞれの家族のもとに帰っていき、ヘンゼルとグレーテルも父と継母のもとへ帰った。継母は最初、帰ってきた2人に対し、とても温かく迎えた。その頃ヘンゼルとグレーテルは町の英雄として、毎日何人もの人がお土産を持って話を聞きに来た。最初は優しくした継母はみんなが持ってくるお金やもので自分だけ贅沢をいただいたのである。ところがある日数人の兵士がやってきて、わが子売り飛ばしとして継母を連れて行ってしまった。グレーテルは不思議に思っていたが、ヘンゼルは少し笑いながら

「さあ。最近では密告が流行ってるから継母さんもそれなんじゃない。」
と言っただけだった。

こうしてまた3人での平和な生活が始まった。

ドイツ児童文学を考察して

まず、ジルというひとについてだが、何故少女ではなく少年に対して愛情を抱いていたのだろうか。領主という仕事柄、周りは男性ばかりだっただろう。また当時領主の城というのは決して居心地のいいものではなかった。そんな環境の中でジルは癒しを、自分たち大人とは違う少年に求めたのかもしれない。よって貧相な感じのする細身の少年よりふくよかな少年を好んだのだろう。何故少年なのかは、正直よく分からないが、かつての自分の姿である少年というのに、歪んだ愛情を向けたのかも考える。しかしとおしく思っていたはずが、今の自分とのあまりにも違いに憎しみを覚え殺害にいたってしまうのではと思う。またルーマニアに実在した封建領主ヴラド公は、周辺地域の絶えない小抗争からドイツ民族やトルコ人を迫害したり虐殺したりした。このことからドラキュラの由来はヴラド公といわれている。しかし彼の場合国の力の維持のためであった。

次に継母についてだが、今回私が読んだヘンゼルとグレーテルは、初期から一度改定されたものだが、初期では継母でなく実母だったそうだ。口減らし自体は病気が流行ったり、ひどい飢饉に襲われたり、封建制により農民が苦しい生活をしてきた中世ヨーロッパでは割りとあることだったとはいえ、実母というのはあまりにショックなものなので改定されたのである。物語を読んだとき継母でも私はショックだった。それもショックだったが、継母の提案に父親が賛同したのがショックだった。しかしそれほど当時の生活が苦しいものだったとうかがえる。

また子供たちは、おばあさんのことを魔女と呼ぶが、彼らはどこで魔女というものを覚えたのだろうか。それはおそらく家庭だろう。15世紀にはジャンヌ＝ダルクが魔女として火刑される。この頃ヨーロッパにおいて魔女という言葉は、かなり偏見を持った言葉として出回っていたことが分かる。

私はこの話を最初読んだとき、言葉が悪いが正直ただの気持ち悪い話としか思わなかったが、世界史と一緒に見てみるとつながっていたりして、最初読んだときとは違った読み方ができたように思う。

ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』【ドイツ】

:青年期のシンパシー

勝木晃平

ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』

車輪の下という作品を読むにあたり、私はまずヘッセという人物について知る必要があると感じた。なぜなら、ヘッセの作品は私が考える「難解な小説」の中に含まれるからだ。この感想を、なぜ持ち得たのかというと、私は中学生の時ヘッセの車輪の下を既に読了しているからなのだ。そのころは、硬い文章だという印象しかなく、決して二度読もうなどと考えることができるような深い対面ではなかった。

そして今、私が読むべき作品を探すとき、なぜか頭をよぎるのがヘッセの車輪の下なのである。今一度その作品に触れ、文章の奥をひも解いていきたいと思う。

物語のあらすじ

主人公であるハンス・ギーベンラート少年は並はずれた才能に恵まれた子供であった。エリートとして周囲に期待され、また彼もそれに応え、家が敬虔なキリスト教徒という背景を持つ彼はエリート養成学校である神学校に2位の成績で合格した。

「とにかく、がんばりなさい！みんなきみに期待しているんだからね。」

「よろしい、それでいいのだよ、きみ。とにかく、歩みをのろくしないように。そうでないと、車輪の下にしかれてしまうよ」

※「車輪の下にしかれる (unters Rad kommen)」=落ちぶれる、墮落する。ひたすら前進していないと、後からの車輪にしかれてしまうように人生の敗北者になるという意味

しかし転機が訪れる。神学校での生活を送る間にエリートであり続けること、周囲の期待に応え続けることに必死な自分自身の生き方に疑問を感じ始めるのである。それに加え、同級生たちから大きな影響を受ける。ハンスに最も深くかかわったのは、ハイルナーという少年だった。

「なんて美しい雲だろう！」と、ハンスが気もちよさそうに見つめながらいった。

「ほんとだ、ギーベンラート」とハイルナーがため息をついた。「あんな雲になれたら！」

「なれたら」？

「あの空を、帆を上げて走る。森も、村も、郡も、州もこえていく。美しい船のように。きみは、まだ、船を見たことがないのか？」

そのうち、ハンスは期待に応えるために自分自身を押し殺すことに疲れ果て、神学校を退学してしまう。

退学後は機械工のもとで見習い修業を始める。しかし今まで味わってきた挫折感や劣等感から自暴自棄になってしまう。その挙句、酒に酔って川に落ちて溺死する。

ああ、ぼくは、ひどくつかれた、

ああ、ぼくは、ひどくまいった、

さいふのなかは、からっぽで、

ふところまでも、からっぽさ。

ハンスは古いメロディーにあわせて口ずさんだ。二十回目になろうとしても、何も考えていなかった。

もう、おしまいだ。

青年期のシンパシー

I. 作者について

ヘルマン・ヘッセ(Hermann Hesse)は1877年のドイツに生まれた。家系はエストニア系であり、父は宣教師であった。14歳で難関である神学校に入学するが半年で脱走。他の学校に入るも続かず、本屋の見習店員となるが、また3日で脱走する。このころの経験が車輪の下の基となっていると言われている。

そのほか、彼は人生において自殺未遂をして精神科病院に入院するなど、若いときにさまざまな苦労をしている。

II. 主人公と作者の共通点

- ・信仰に厚い家庭に生まれた
- ・厳格な父親により、勉強を強いられた
- ・エリートと呼ばれる学校に入学した
- ・自らの生き方に疑問を感じた
- ・退学など挫折を味わった

III. 考 察

ヘッセの若いころの経験が「車輪の下」の基となったと先に述べた。この小説は、ヘッセの自分自身の人生が振り返られていて、また自分自身への評価ともとれる点が含まれていると思う。主人公ハンスと作者ヘッセの共通点を挙げたが、酷似していることに気づくだろう。きっと幼少期の周囲のヘッセへの期待や、神学校時代の思い出をハンスとして描くことで、単なる自伝小説ではなく何か社会や周囲の人間に対して感じたことを私たちに伝えようとしたのだと思う。

文中にカワウソなど小さい生き物が時々、風景描写などの中に登場している。それらに対してヘッセは「臆病」や「ずるそう」など、マイナスな印象を与えて形容している。彼はもしかしたら、自分の周りに存在する自然や生き物に、自分にはない自由や広さを感じ、憧れを抱きつつも、それらを貶めることで自らの優位性を守ろうとしていたのではないだろうか。

彼は入学した神学校で、ハイルナーという空想家の友人を得る。ハイルナーは詩人のような感覚を持った人間であり、ハンスは彼に強く惹かれていたようだ。ハイルナーはハンスが見たことのない、ライン川での船の話聞かせた。ハイルナーはハンスと違い、周囲の風景のことをよく「美しい」と表現した。

ハイルナーにとって抽象的なものはひとつもなく、想像できないものや、空想で鮮やかに描けないものなどはなかった。彼はまさしく、ハンスの持っていないものを持った人間だったのだ。

また、作中で同級生がひとり、池で溺死するという事件があった。生徒たちはみな蒼白になり、死の恐怖にとらわれている様子だった。

この事件が、なぜこの作品に必要だったのだろうか。

これは憶測にしか過ぎないが、ヘッセが自殺をはかったことと何か関係があるように思われる。彼が死を身近なところで感じたならば、彼を投影したハンスにも同じく死の残酷さを目にする必要があったのではないだろうか。加えて、この「溺死」は、作品内において「既視感」と「運命」をほのめかす役割を担っているようだ。青年たちに訪れる逃れ難い絶望を表すため、この死は作られたと考える。

その後、ハイルナーは学校を脱走した。彼の失踪は情熱的で伝説的なものとなり、ハンスの心にも大きな衝撃を与えたに違いない。友を失ったハンスは、学校でその後孤立していくことになる。

そして彼もまた、退学という道を選ぶのだ。彼は、友を得ることでいい意味でも悪い意味でも、世界を広げたのだと思える。青年期においての人との関わりはともすると危険性をはらんだものなのかもしれないという感想を持った。

ハンスは死んだ。冷たい水の中で誰にも看取られることのない非業の死を遂げた。父は泣かなかった。ただ黙って、ハンスの穏やかな死に顔を見つめていた。私はそのシーンが一番心に残っている。父は何を考えていたのだろうか。いや、ヘッセは、この「父」に何を考えさせたのだろうか。私は、このシーンにヘッセの、「父」に対する復讐のようなものを感じずにはいられないのだ。

一見すると、「車輪の下」は人に容易な読書を許すような作品ではない。冒険小説のような躍動感や高揚感もない。しかし、なぜこの作品が、私を含め今も多くの人を惹き付けるのだろうか。

理由の一つとして、この主人公・ハンスは人間の中に少なからず存在するからなのではないか、ということが考えられる。人間といっても、私は特に現代人と「車輪の下」との関係性について言及したい。

車輪は動きだし、加速する。車輪を動かすのは、ハンスの父親か、ヘッセの父親か、あるいは車輪自体が社会そのものの比喩だったのかもしれない。

車輪は動きを止めず、ハンスは翻弄され、疲弊した。そして最終的にはその車輪に轢かれたかのように命を落とした。この、絶望的な結末から私たちが得られるものは何か？

現代社会に生きる私たちにとって、社会を車輪に例えるのは不自然なこととは思わない。青年期の私たちは、「疾風怒濤の時代」と表わされることもあるように、いつも何かに追われ、急ぎ立てられて生きている感は否めない。

私も、義務教育を経験し、受験もした。猛勉強をしたこともある。今思えば、何をそんなに焦っていたのか、と思うほど心に余裕がなかったこともあった。やりたいことと、やらなければならないことの狭間で苦しんでいたのだ、と冷静な分析をすることも今ではできるが、そのころの自分には、言葉では表現できない何かがあったように思う。

私の場合、ヘッセやハンスと違い、両親に過剰な期待をされることはなかったし、無理な勉強を要求されることもなかった。それでも感じた、私を取り囲むあの大きな力は何だったのかと、「車輪の下」を読んで考えた。

青年期はあらゆる欲求と義務を経験する。

親の期待に応えることで、認められたいという欲求は果たせるかもしれない。しかし、青年期の心が求めるのはさらなる自己の確立である。その、自己の確立にとって重要な役割を果たすのが友人なのだ。学校という共同生活に身を置いたとき、私たちは狭かった世界を広げることになる。主観が主だった心が、他者の存在や、その感情を知ることによって客観を手に入れる。友人の言葉は自分のものとは全く違う世界を見せてくれるものだ。そうやって別の視点から自分を見ることをはじめる。時に、自分の誤りを見つけ、時に優越感を得る。そんな他者の介入を許しながら、私たちは自己を探し、研磨する。

青年期の人間にとって、それらの活動は自由に、自然と行われていくべきだ。行き過ぎる圧力は、時に心身の自由を奪ってしまう。そうして動きを止めたとき、私たちは自分を確立する前に、自分の力の敵わない力に辟易するのだ。いつの時代もそうかもしれないが、私たちの周囲は、常に私たちの手が到底及ばない距離でまわっているように見えがちだ。それに気づいた時、私たちが「車輪」を見てしまった時、ハンスの苦悩は私たちの傍にあるような気がする。

時代を超えて、ハンスとヘッセの苦しみを垣間見ること、共有することは現代の境遇を客観視しているようなトランスを覚える人も少なくないだろう。しかしハンスのように絶望する必要はない。彼の生き方を見ることで思考は開かれたと気づくべきだ。

人生を共有し、客観視し、考察し、自らの生き方を模索することこそが、今も多く教育現場でこの「車輪の下」が推薦図書とされる所以なのだろう。

(かつき・こうへい：欧米言語文化講座 英語圏)

ジェームス・マシュー・バリー『ピーター・パンとウェンディ』

:ピーター・パン誕生の秘密

米原万紀子

ジェームス・マシュー・バリー『ピーター・パンとウェンディ』

ある晩、ダーリング家の少女ウェンディ、弟のジョンとマイケルの寝室に、少年ピーター・パンが、空を飛んで窓から入ってくる。以前この部屋で失くした影法師を取り返しに来たのだ。

ピーター・パンは、「ネバーランド」に住む、大人にならない奇妙な少年である。彼は、大人になりたくなかったために、生まれた日に家から逃げ出し、ケンジントン公園の池の中にある島へ飛んで行った。人間の子どもは、もとはみんな小鳥だったので、飛ぶことができるのだ。ピーターはその島で、人間の子どもでもなければ、小鳥でもない男の子として楽しく遊び暮らしていた。ある時ピーターは家へ帰り、悲しそうな顔をして眠るお母さんの寝顔を見て、戻ることを決意する。しかし、楽しい島の暮らしも名残惜しかったため、一度島へ帰り、何年も遊んだ後、小鳥や妖精たちに別れを告げて、再びお母さんのところへ飛んで行った。すると、開いているはずの窓はぴたりと閉まっており、中ではかわいい赤ちゃんを抱いたお母さんが、幸せそうに眠っていた。

「おかあさん、ぼくだよ。ピーターだよ」

と大声で叫んでみても、お母さんには聞こえなかった。しかたなく泣きながら島に帰ったピーターは、それから、このネバーランドという島で、成長することなく、迷子の子どもたちを従えて暮らしていた。

影法師がうまくくっつけられないピーターの泣き声で目を醒ましたウェンディは、裁縫箱を持ってきて、影法師をピーターの足に縫い付けてあげた。そしてピーターは、ウェンディを、夢の島の子どもたちのお母さんとしてネバーランドに招待することにした。ピーターは、ウェンディと、ウェンディがどうしても連れて行きたいという弟2人に妖精の粉をふりかけ、飛び方を教え、3人をネバーランドに連れて行く。そこで彼らは、インディアンと仲良くなったり、海賊と闘ったりと、さまざまな冒険を体験する。

しかし、やがてウェンディたちは両親の家に帰りたいたいと言い出し、迷子の子どもたちもウェンディの家の子どもになることになるが、大人の世界を拒絶するピーターは、ウェンディの家で暮らすことを拒み、代わりにダーリング夫人の提案を受け入れて、年に一度、春の大掃除のときだけ、ウェンディをネバーランドに連れて行くという約束が成立する。ウェンディは毎年ピーターを待っていたが、ピーターは来たり来なかったり。月日が流れ、再び彼がやってきたときには、ウェンディはすでに大人になり、ジェインという娘がいた。するとピーターは、ジェインを連れてネバーランドに飛び立つのだった。こうして、同じことがいつまでも繰り返されていくのだろう…。

ピーター・パン誕生の秘密

I. 作家と作品について

ジェームス・マシュー・バリー (James Matthew Barrie 1860 - 1937) は、イギリス・スコットランドのキリミューア生まれの劇作家、童話作家、ファンタジー作家であり、「ピーター・パン」の作者として有名である。

1902年、ピーター・パンが初めて登場した「小さな白い鳥」を出版。しかしこの作品でピーター・パンは、第13章から第18章にかけてのみ出演している。1904年に戯曲「ピーター・パン 大人になりたがらない少年」(3幕)を執筆。1906年、「小さな白い鳥」から抜粋した「ケンジントン公園のピーター・パン」を出版。そして1911年、さまざまな版の最終版として小説「ピーター・パンとウェンディ」を執筆、刊行した。さらに1928年には、戯曲「ピーター・パン」5幕版を出版。

また、ウェンディの家庭すなわちダーリング家は、バリーが散歩を欠かさなかった「ケンジントン公園」で出会ったデイヴィス家をモデルにしているとも言われている。

II. ピーター・パンは子どもの象徴

ピーター・パン (Peter Pan) は、ジェームス・マシュー・バリーの戯曲「ケンジントン公園のピーター・パン」、小説「ピーター・パンとウェンディ」などの主人公である。海賊のフック船長やインディアンタイガーリリーが住む異世界・ネヴァー・ネヴァー・ランド (ネバーランド) に移り住み、妖精・ティンカーベルと共に冒険の日々を送る永遠の少年である。

ピーターは子供の長所と短所をデフォルメしたキャラクターとして描かれており、純粋で一途な反面、善悪やけじめの見境がなく身勝手な性格描写が顕著である。そのようなピーターの態度に対して皮肉ったりたしなめたりする文章がみられることから、ピーターはヒーローとして描かれているのではなく、あくまでも子供の象徴として登場することが分かる。

III. 永遠の少年・ピーター・パンの誕生

「ピーター・パンとウェンディ」では、ピーター・パンは、生まれた日に両親が、彼が大きくなったら何になるか話しているのを聞いてケンジントン公園に逃げ出し、妖精たちと暮らすようになった。そして、何か月も家を離れて暮らして、ある日飛んで帰ってみると、なんと窓は閉まっている。そしてお母さんの横には、別の小さい男の子が眠っており、ショックを受けたピーターは、それからネバーランドで暮らすようになったとされている。

本作では、成長の拒否、母親からの逃走、そして母親からの追放。この3つが永遠の少年・ピーター・パンを生んだといえるだろう。つまり「ピーター・パン」は、単に成長拒否の少年をテーマとした作品ではないことが分かる。

ちなみに、「ケンジントン公園のピーター・パン」では、ピーター・パンはロンドンのケンジントン公園で乳母車から落ちたところをベビーシッターに見つけられず迷子となったことから、年を取らなくなったとされている。

IV. 今なお愛され続けるピーター・パン

「大人になりたくない」という若者の精神状況を分析したユング派の書物や「ピーターパン症候群」という言葉も有名なこの物語は、児童読み物としても普及しており、ディズニーのアニメーションでも有名である。また、イギリスやアメリカで成功したミュージカルもロングランを続けていて、そのミュージカルは日本でも20年にわたって上演され続けている。

これほどまでの人気をおしなべて保っているのは、誰もが一度は思ったことがあるだろう「大人になりたくない」という気持ちなど、やはり「ピーター・パン」という作品そのものにある力なのだろう。

(よねはら・まりこ：幼稚園教員養成課程)

マリー・ルイーズ・ド・ラ・ラメー『フランダースの犬』

:フランダースの犬の魅力

石川 都

ラメー『フランダースの犬』

舞台はベルギーの首府アントワープから一里半ばかり離れたフランダース地方。村はずれの小さな小屋におじいさんと少年ネルロと犬のパトラッシュの三人は暮らしていました。牛乳運びの仕事で生活をしのぎ、貧しいながらも平和に暮らしていました。そして、ネルロはいつかルーベンスのような偉大な画家になることを夢見ていました。

しかし、ある夜粉挽場が火事になり、ネルロは粉挽屋の主人に放火犯だと疑われてしまいました。それ以来牛乳運びの仕事も減り、ほんのわずかのお金しか入ってこなくなっていました。さらに、クリスマスを目の前に優しくおじいさんが亡くなってしまいました。そしてついに家賃が払えず小屋からも追い出されてしまったのです。

その日はネルロが出演したアントワープの絵画コンクールの結果発表の日でもありました。しかし結果は落選……。ネルロは落胆し、空腹と疲労から幾度も倒れそうになりながらも厳しい吹雪の中、村へとひきかえしたのです。帰り道にパトラッシュが誰かの財布を拾いました。その財布が粉挽屋のものだとわかると、二人は残りの力を振り絞って、粉挽屋のもとへと届けました。そして、ネルロはパトラッシュを残し、再び吹雪の中へと飛び出て行きました。財布の中身は粉挽屋の全財産でした。帰宅した主人はネルロにきつくあつたことを悔やみ改心したのです。粉挽屋に残されたパトラッシュはおかみさんに御馳走を与えられても振り向きもせず、ドアのそばを離れず逃げ道はないかとうかがっているのです。ネルロがどんな思いでパトラッシュを残してただひとり、飢えと悲しみを覚悟して出て行ったのか——それはパトラッシュにしかわからないことでした。そして隙を見つけ、パトラッシュは飛び出しました。ネルロの匂いを嗅いで、足跡をたどり、吹雪の中走り続けました。パトラッシュはついにアントワープの町の大寺院のなかに愛するネルロの姿を見つけ、よろめくようにかけよってぴったりとネルロに寄り添いました。そして月の光に照らし出されたルーベンスの名画をみて「見た。ああ僕はとうとう見た。ああ神様、もうこの上はなんもありません。」そういつて二人はルーベンスの名画の下で息を引き取ったのです。翌朝、粉挽屋の主人が迎えに来、また有名な画家がやってきてこう言いました。「本当の値打ちから言うところの子が選ばれるべきであった。あの画には天才のひらめきがあった。わしが何とかして探し出してみっちり仕込んで、その天才を磨こうとおもっていたものを——」けれども偉大なルーベンスの画の方にむけたままの死に顔は、口許にかすかな笑みをうかべたまま、あたりの人に「もう遅い」と言っているかのようでした。

フランダースの犬の魅力

I. 作家と作品について

イギリス、サフォーク州生まれ。子どもの頃、自分の名前をうまく発音できず、ウィーダと言っていたところ、周りからもそう呼ばれるようになったため、これをそのまま筆名にした。1859年、20歳のときにロマンス小説でデビューし、次々と作品を書いて人気作家となり、社交界で活躍する。イタリアの動物愛護協会設立に尽力するほど犬が好きで、1872年、前年のアントワープ旅行を元にした「フランダースの犬」を出版する。晩年は人間不信となり経済的にも苦しくなるが、自分の飼う犬たちのために少ない年金を使い、最終的には馬車の中で生活するまでになる。見かねた人々が安アパートに入れてくれたが、寒さのため身体が弱っており、肺炎をこじらせて亡くなった。

II. 選んだ理由

「フランダースの犬」という作品は小さいころに読んだことがあり、ただ悲しい物語だというイメージを抱いていた。かわいそうな話だったので小さいころ読んだきり読まなかったけれども、もう一度どうい話か読んでみたいと思った。今読み返すとやはり悲しさもあったが、ネルロとパトラッシュが貧しいなかでもお互いを思いやり気遣う暖かさがあった。結末も二人は死んでしまったけれど、最期までより添い続けた二人に深い絆を感じた。子ども向けの物語だが大人にもぜひもう一度読み返してほしい作品である。

(いしかわ・みやこ：幼稚園教員養成課程)

ヒュー・ロフティング「ドリトル先生」

:みんな大好きドリトル先生

平良紫野

ヒュー・ロフティング「ドリトル先生」

ドリトル先生は、イギリス北部の（架空の街）、沼のほとりのパドルビーに住み、町医者をしていた。だが、動物好きが高じて、近隣の人々が寄りつかなくなってしまう。長年飼っていたオウムのパリネシアが、ドリトル先生に獣医になることを勧める。しかも動物語の特訓をしてくれた。

たちまち動物たちと話せるようになったドリトル先生は、獣医として、大評判をとるが、ワニが迷い込んだりしてこれまた近隣の百姓たちは牛や馬を連れてこなくなってしまう。

お金が底をついてきたある年の冬、はるばる飛んできたツバメによって、アフリカの猿たちが大疫病によってどんどん死んでいるという知らせを受ける。ドリトル先生は早速借金をして船を仕立て、パリネシア、猿のチーチー、イヌのジップ、アヒルのダブダブ、白ネズミ、フクロウのトートーを連れて出発する。

ツバメたちに案内されてアフリカに着いたが、嵐で船は粉みじんになり、猿の住む国に向かう途中、ジョリキンキ王国の白人を嫌う王様に捕まってしまう。だがパリネシアの名案によって迷信深い王様をうまく煙に巻いて、猿の国へ脱出する。

猿の国では大忙し。トラやライオンまで助手に来てもらい、先生は朝から晩まで働いた。おかげで疫病は収まり、猿たちは大感激して、先生に珍獣中の珍獣である、二つ頭のオシツオサレツをプレゼントする。

帰り道に再びジョリキンキ王国を通り、道に迷ったところで捕まってしまうが、今度は王子のバンポに、顔を白くすると約束して見事脱獄する。王子に船を用意してもらい、ようやく帰途につく。

ところが、途中その海域でおそれられている海賊に遭遇する。いったんはツバメに引っ張ってもらって逃れたものの、カナリアの住む島に隠れているときに、再び海賊に捕まりそうになる。

今までのぼろ船がもうすぐ沈むことをネズミたちから教えられた先生は、先生の船に乗り移って空っぽの海賊船にのって沈みゆく船に乗った海賊たちに、略奪をやめこの島で百姓をするように命じる。

海賊船を乗っ取ったドリトル先生一行は、その船の部屋の一つに少年が閉じこめられていることを、耳の鋭いトートーによって発見する。彼のおじさんが行方不明だという。海の真ん中で、あらゆる情報を動物たちから求めたが、どこにもおじさんは見つからなかった。

イヌのジップは自慢の鼻を使って搜索を始める。あらゆる方向からの風を嗅ぎ、もうだめかと思ったとき、おじさんのかぎたばこのにおいをキャッチ。岩だらけの小島の穴に入っていた小父さんを見事発見する。

二人の故郷の港町に送り届けると、その町の町長さんからジップはその功績をたたえて金の首輪をもらったのだった。こうしてようやく先生一行は懐かしのイギリスに戻ってきたのだった。

みんな大好きドリトル先生

I. 作者について

ヒュー・ジョン・ロフティング (Hugh John Lofting, 1886年1月14日 - 1947年9月26日) は、アイルランド系アメリカ人の児童文学作家。

イギリス・バークシャーのメイデンヘッド生まれ。若い頃 (1912年以降) アメリカ合衆国やカナダで土木技師をしていたが、1916年にイギリス軍人として第一次世界大戦に出征、負傷した。軍用馬の殺処分にも多数遭遇、そのことに心を痛め、息子に送る手紙に書いていた物語をアメリカ人としてアメリカ合衆国で発表した。これが彼の代表作「ドリトル先生」シリーズであり、第二次世界大戦期間を除き全10巻を執筆した。加えて、ロフティングの死後、夫人が遺稿を整理して刊行した3冊がある。日本では井伏鱒二による翻訳で知られる。

II. 作品について

ドリトル先生 (ドリトルせんせい、英: Dr. Dolittle) は、アメリカの小説家ヒュー・ロフティングが著した児童文学のシリーズ名。また、その主人公である博物学者・医学博士・ジェントリの通称でもある。フルネームはジョン・ドリトル (John Dolittle) 。このシリーズは全12冊と番外編1冊。挿絵も作者の自筆によるものが使われている。刊行年は全て原書のもの。

- ・ドリトル先生アフリカゆき (1920年刊)
- ・ドリトル先生航海記 (1922年刊)
- ・ドリトル先生の郵便局 (1923年刊)
- ・ドリトル先生のサーカス (1924年刊)
- ・ドリトル先生の動物園 (1925年刊)
- ・ドリトル先生のキャラバン (1926年刊)
- ・ドリトル先生と月からの使い (1927年刊)
- ・ドリトル先生月へゆく (1928年刊)
- ・ドリトル先生月から帰る (1933年刊)
- ・ドリトル先生と秘密の湖 (1948年刊)
- ・ドリトル先生と緑のカナリア (1950年刊) : 遺稿を夫人が整理し刊行
- ・ドリトル先生の楽しい家 (1953年刊) : 遺稿を夫人が整理し刊行
- ・ガブガブの本 - ドリトル先生番外篇 : 遺稿を夫人が整理し刊行

III. 物語の背景

イングランド東部・ノーフォークの湖沼地方をモデルにした、「沼のほとりのパドルビー」という架空の町にある、ドリトル先生の屋敷が物語の最初の舞台になっている。

その屋敷には、先祖が園遊会をしたという広い庭があり、たくさんの動物たちが住んでいた。先生は博物学者であり、人間の医者として妹のサラ (Sarah) と暮らしていた。

先生はある日、相棒のオウムのポリネシアから、動物語の存在を知らされ、ポリネシアの手ほどきで、動物たちと話すことができるようになり、その噂を聞きつけた近所の動物たちが、治療のために屋敷におしかけて来るようになる。それからというもの人間の患者は誰も来なくなり、収入も絶たれてしまう。サラは人間よりも動物相手になってしまった兄に愛想を尽かして出て行ってしまい、一人身となってしまふ。

先生がこうなってしまったのは自分達のせいであると気づいた動物たちは会議をひらき、能力を出し合って、先生を手伝い始める。家事や家の動物たちの世話はアヒルのダブダブ、会計はフクロウのトートーが担当することになった。夕食の後は暖炉にあつまり（寂しさをまぎらわすために）動物たちが身の上話をするようになった。

ドリトル先生の評判は動物たちによって世界中に広がり、ある夜、先生の元にアフリカで深刻な伝染病が発生し、動物達が先生の救援を必要としているというニュースが届く。これをきっかけに、ドリトル先生はアフリカから果ては月にまで診療に赴くこととなる。

IV. 映像化作品

映画化（『ドクター・ドリトル』 エディー・マーフィー主演など）、アニメ化、CMキャラクター化されており、親しみやすいドリトル先生は、みんなから愛されています。

参考文献：ドリトル先生 Wikipedia

(たいら・しの：スポーツ・健康科学・生活環境)

エリック・カール『はらぺこあおむし』

:みんなに愛されるわけ

乾 彩友美

エリック・カール『はらぺこあおむし』

「おや、はっぱの上にちっちゃなたまご」
お月さまが、空からみていました。
お日様がのぼって暖かい日曜日の朝です。
ぽん！とたまごから、ちっぽけなあおむしが生まれました。
あおむしはおなかがぺっこぺこ。あおむしは、食べるものを探し始めました。
そして月曜日、りんごを一つ見つけて、食べました。まだおなかはぺっこぺこ。
火曜日、梨をふたつたべました。やっぱりおなかはぺっこぺこ。
水曜日、すももを三つ食べました。それでもおなかはぺっこぺこ。
木曜日、いちごを四つ食べました。まだまだおなかはぺっこぺこ。
金曜日、オレンジを五つ食べました。

(まだたべものを探してます)

土曜日、あおむしの食べたものは なんでしょう。

チョコレートケーキと

アイスクリームとピクルスと

チーズとサラミと

ぺろぺろキャンディーと

さくらんぼパイとソーセージと

カップケーキと

それから

すいかですって！

その晩、あおむしはお腹が痛くて泣きました。

次の日はまた日曜日。

あおむしは緑の葉っぱを食べました。

とてもおいしい葉っぱでした。

お腹の具合もすっかりよくなりました。

もうあおむしは、はらぺこじゃなくなりました。

ちっぽけだったあおむしは、大きくて太っちょになったのです。

まもなくあおむしは、さなぎになって何日も眠りました。

それからさなぎの皮をぬいででてくるのです。

「あっ、ちょうちょ！」

あおむしが、きれいなちょうちょになりました。

みんなに愛されるわけ

I. 作者について

エリック・カール (Eric Carle, 1929年6月25日-) はアメリカの絵本作家。

ニスを下塗りした薄紙に指や筆で色をつけた色紙を切抜き、貼りつけていくコラージュの手法が特徴。鮮やかな色彩感覚によって「絵本の魔術師」といわれる。カールが発表した絵本は40作以上ののぼり、39カ国語に翻訳され、出版部数は2500万部を超えている。

II. 作品について

『はらぺこあおむし』 (原題: The Very Hungry Caterpillar) は

アメリカの絵本作家エリック・カールが1969年に出版した幼児向け絵本。

日本では森比左志訳で偕成社より発売されている。

ジョージ・W・ブッシュ米元大統領が、子供の頃に読んで印象に残った本として、この作品を挙げた。しかし、この作品が最初に出版されたのはブッシュ大統領が大学生の頃だった事から、彼が子供時代にこの本を読んでいなかった事が暴露されてしまった。という逸話がある。

III. 愛されるわけ(魅力)

私はこの「はらぺこあおむし」には、8つの魅力があると思います。

- 1、生まれたばかりのあおむしが、おなかが痛くなったり、さなぎになったりする変化に富んだ物語に、ハラハラドキドキ。最後に美しい蝶になることで子どもたちは、ほっと安心し、大きくなることを、希望と期待をもって受け入れるようになります。
- 2、あおむしといっしょに試練を乗り越えることで、耐えて待つことや、困難を克服することの大切さを学びます。食べ過ぎは体に良くないということも。
- 3、あおむしが食べるのは、りんごやなし、ケーキやキャンディなど、どれも子どもたちが大好きなものばかり。絵本の中で夢がかなえられ、いろいろな食べものの名前も覚えます。
- 4、1個のりんご、2個のなし、3個のプラム…。読みながら自然に数を覚えます。
- 5、緑色のグラデーション、カラフルな水玉。カールのコラージュが生み出す色彩が、心をイキイキさせます。
- 6、お腹が痛くて泣いている、小さなあおむし。まるまる太っちゃになったあおむし。最後には、羽を広げた見ごとな蝶！ダイナミックに変化する形に、子どもたちは大喜び。
- 7、青白い月が照らす土曜日の夜から始まった物語は、日曜日のすばらしい日の出を迎え、あおむしの元気な活動が始まります。1週間の曜日や1日の日のめぐりなど、社会のしくみを知ることができます。
- 8、ページにあいている小さな穴のしくみ。まだお話をよく理解できないごく幼い子どもたちも、この穴に指を入れて遊べます。
「さわれる本、読めるおもちゃ」を作りたいという、カールの願いから生まれたアイディアです。

これらが、多くの人々に愛される理由なのではないかと思います。

私も時々図書館などで読んでみます。とてもいい絵本だと思います。

参考文献：はらぺこあおむし Wikipedia
世界中の「はらぺこあおむし」

(いぬい・あゆみ：スポーツ・健康科学・生活環境)

サン=テグジュペリ『*Le Petit Prince*』

:星の王子さまの謎

笹尾 瞳

アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリ「星の王子さま」

僕が6歳の時。色えんぴつではじめて描きあげたのは大蛇『ボア』の絵だった。その『ボア』はゾウをまる飲みして消化している大蛇の姿だ。この傑作を、僕はおとなたちに見せて、「この絵こわい？」と聞いてみた。すると答えはこうだ。「どうして帽子がこわいの？」おとなたちにはいつだって説明がある。絵は認められず、こうして僕は6歳にして画家というすばらしい職業をあきらめてパイロットになった。

今から6年前、僕はサハラ砂漠に飛行機が不時着した。エンジンが壊れて、生きるか死ぬかの問題だった。僕は最初の晩、人の住む地から千マイルもかなたの砂の上で眠りについた。だが夜明けに突然小さな変わった声で起こされた。

「おねがい……ヒツジの絵を描いて!」

飛び上がって起きるとそこにはとても不思議な雰囲気、輝くばかりの愛らしい姿をした小さな男の子がいた。ヒツジをほしがる小さな男の子に僕は例の『ボア』の絵をみせた。

「ちがうちがう!ボアに飲まれたゾウなんていないよ。」

絵がボアと見破ったこの子がどこから来て、どうしてここにいるのか理解するのに僕はとても時間がかかった。

男の子はよその星から地球にきた王子さまだった。王子さまの星はとても小さくて、バオバブの木が3本生えてしまったら破裂してしまうほどの小ささらしい。これは三日目に王子さまが教えてくれた。四日目の朝は、小さな星を何歩か移動して夕陽(ゆうひ)を何度もみたという話。なんと一日に四十四回も見たことがあるらしい。王子さまがぽつりとつぶやいた。

「ねえ……悲しくてたまらないときは、夕陽(ゆうひ)が見たくなるよね……」

王子さまは一日に四十四回も悲しくなったのだろうか。

五日目には王子さまの秘密がひとつ明らかになった。王子さまの星には一輪のバラがいた。バラはとても美しかったが見栄をはったり気まぐれな言葉を言っでは王子さまを困らせていた。そんなわがままなバラに嫌気がさして王子さまは小さな星を出て行ったのだ。そこから王子さまは6つの星を旅する。王さまの星。うぬぼれ男の星。呑み助の星。実業屋の星。点燈夫の星。地理学者の星。どれも王子さまが住める星ではなかった。そうして7つ目の星が地球だった。地球についた王子さまはヘビに出会う。

「もし故郷の星にどうしても帰りたくなったら、おれが力を貸そう。おれが……」

「おれにはすべてが解けるから。」

そうヘビに言われて王子さまは約束をした。その後たくさんのバラやキツネにも出会った。

そのキツネとは『絆』を結ぶ。そして大事なことを教えてくれた。

「きみのバラが、この世に一輪だけだってことがわかるから。」

「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えないんだ。」

王子さまはキツネの話に続き、鉄道員、物売りの話をしてくれたが、物売りの話を聞いた時には僕が砂漠に不時着してからちょうど一週間目の時だった。そして持っていた水の最後の一滴がなくなった。僕と王子さまは井戸を探しに砂漠を歩き続け、夜明けにようやく井戸を見つけた。井戸が見つかる前に王子さまは言った。

「星々が美しいのは、ここから見えない花が、どこかで一輪咲いているからだね…」

「砂漠が美しいのは……どこかに井戸を、ひとつかくしているからだね…」

水を飲んだ後、僕は飛行機の修理にもどり、明日の夕方にもた王子さまと再会することを約束した。なんだか僕は不安になっていた。

翌日の夕方もどつてくると王子さまがへびと話をしていた。へびがその場を去った後、王子さまにかけよると王子さまは雪のように蒼白になっていた。王子さまは飛行機が直ったことも知っていて、今夜自分も星に帰ると言い出した。たった一輪のバラを守る責任があるとも。

「夜になったら星を見てね。きみには、笑う星々をあげるんだ!」

王子さまは僕に苦しむ姿を見せたくないと言ってひとりでへびのもとへ行った。僕は動くことができなかった。二人で黙って泣いた。王子さまの足首あたりに、ぴかっと黄色い光が走った。たった一瞬で王子さまは動かなくなった。砂漠のせいで物音ひとつせず、王子さまは倒れた。

あくる朝王子さまはどこにもいなかった。僕は、王子さまがちゃんと星に帰ったのだとわかった。そうして僕は、夜、星々の笑い声に耳をすますのが、好きになった。

星の王子さまの謎

I. 作家について

1901年6月29日アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリはフランスのリヨンで生まれる。美術学校の建築科に入学。20歳の時2年間の兵役を経て飛行機操縦免許を取得し、郵便航空業に就く。かたわら作家としても名声を高める。第二次世界大戦中アメリカに亡命。『星の王子さま』はこの頃書かれた作品であり、1943年に出版された。その後空軍パイロットとして北アフリカ戦線に参加。1944年7月31日偵察飛行中行方不明に。

II. 『星の王子さま』というタイトル

『Le Petit Prince』は直訳すると『小さな王子様』になる。しかし、日本の多くの出版社が『星の王子さま』と邦訳しているのはなぜか。フランス語で『Le Petit Prince』。英語では『The Little Prince』、中国語では『小王子』。他の国ではそのままストレートに訳すケースが多い。日本語で「王子さま」というと、子どもをイメージするケースが多いので「小さな王子さま」だと、くどい感じがするからかもしれない。ただ「王子さま」だけでは味気なく、この王子さまは地球人ではない、よその星からやってきた、ちょっと不思議な王子さまなのだということがわかるように「星の」がつけられたようだ。

Ⅲ. 王子さまとパイロットの関係

王子さまも、パイロットも作者の<分身>とされている。パイロットは、童心を忘れ、少し頭が堅くなった大人。王子さまは、まだ純粋で何でも素直にもの言える子どもだ。初対面ですぐに仲良くなったのは王子さまがボアの絵を見破ったからなのだ。

Ⅳ. わがままなバラの花

バラの花は、『星の王子さま』のなかで重要な役割を果たしている。バラの花は<愛>の象徴なのだ。王子さまがアクションを起こし、自分の星を飛び出すきっかけがバラの花であり、もとの星へ帰るきっかけもバラの花だ。バラは、王子さまに愛の存在と責任を気付かせるために作者が用意したものだ。また、このバラは作者の妻であるコンスエロであるともされている。『星の王子さま』は、コンスエロの遺書でもあり、作者はありのままのコンスエロを丸ごと受け入れようとしたメッセージを『星の王子さま』に込めて、コンスエロにこっそり語りかけたのだ。

Ⅴ. キツネの使命

キツネは、ある<使命>をおびて王子さまと接触をした。キツネは王子さまに二つの大切なことを教える。ひとつは、「仲良くなったら（絆を結んだら）<責任>を持たなければならない」ということ。もうひとつは、「大切なことは目に見えない」ということだ。元から答えは王子さまの中にあり、それをキツネが言葉にしてくれたのだ。王子さまの答えが見つかった時が、パイロットの飛行機が直る時だ。逆に言うと、飛行機の修理が終わった時に答えが表われる。キツネは<老賢者>として登場し、王子様の旅の<終点>を誘導した。

Ⅵ. 王子さまは死んでしまったのか

この世のものでない王子さまは、時がくれば消える運命にあったのだ。再びヘビに出会い、もとの星へ帰る打ち合わせをヘビとする。王子さまの星は遠く、体は重すぎて持っていけないのだ。だから魂となり、王子さまは自分の星に帰るほか、方法はなかった。そこで強い毒をもつヘビに出会った意味がでてくる。しかし、作品の中で<死>という言葉は具体的にでてこない。これは、作者が読者に対して「きみたちはどう解釈するか、自分の目によくみてごらん」と訴えかけているからなのだ。王子さまが姿を消したあと、パイロットが砂漠をかけずりまわり、必死で王子さまを探すが、結局見つからない。しかし、王子さまはパイロット自身の中にいた。作者の分身である二人が融合されたのだ。

Ⅶ. 私が『星の王子さま』を選んだ理由

この本をまじめに読んだのは、高校生の時だった。新訳として出版された文庫本を買い、何度も何度も読んだ。最後まで読んだ後、とても純粋な気持ちになれる。様々なメッセージがこめられた『星の王子さま』は、一度読んだだけでは理解できなかった。それでも何度も読むうちに自分なりに解釈したり、友達と話し合ったり、読めば読むほど考えさせられた。上記に書いた以外にもたくさんの謎や秘密があり、刊行後60年以上たった今でも世界中で愛されている本だ。もっとたくさんの人に読んでほしいと思いこの本を選んだ。

(参考文献)

星の王子さま サン=テグジュペリ 河野万里子訳 2006 新潮社
『星の王子さま』の謎が解けた 吉田浩 2001 二見書房

(ささお・ひとみ：幼稚園教員養成課程)

『シャーロットのおくりもの』

：作品から学んだこと

坂口 渚

『シャーロットのおくりもの』

草花が咲き、小鳥がさえずる春の朝の中で、農場の1日が始まろうとしていた。少女ファーンの牧場で11匹の仔豚が誕生した。しかしファーンの父アラブルは仔豚の中に未熟児がいるのを見つけた。母豚のお乳は10個。父は未熟な仔豚を始末しようとしたが、そのことを知った娘のファーンが飛んで来て反対した。泣いて懇願する彼女に、その仔豚が預けられることになった。ファーンはウィルバーと名付けて、一生懸命に世話をした。ファーンの優しい努力で、ウィルバーはすくすく育った。だがそんな幸福はいつまでも続かなかった。成長したウィルバーをいつまでも手元においておくことはできず、手離さなければならなくなったのだ。ウィルバーがファーンの伯父ズッカーマンの農場に買われていく日、それはとても悲しい日だった。ズッカーマン農場にはガチョウのおばさんや羊、それにネズミのテンプレトンなど多くの仲間がいたが、ウィルバーはファーンと別れた淋しさでしょげかえっていた。そのうえ、自分がいつか肉にされてしまうのだということを知って、すっかり怖れおののいていた。

すると、どこからか女性の声がした。「私が友達になって命を救ってあげる！さあ胸を張って！」優しいクモのシャーロットがなぐさめてくれたのだ。ウィルバーはシャーロットと友達になり、明るさを取り戻したが、いつか殺されると思うと元気がでなかった。ウィルバーに、命を助けると約束したシャーロットは、小屋の入り口に自分の糸を織って「見事な豚」という文字を作った。これがたちまち評判となり、ウィルバーを1目見ようと見物人でいっぱいになった。それがあきられると「すばらしい」という文字を作り、さらに「新しく輝く効果」と織った。3度人々は集まり、ズッカーマンはとうとうウィルバーを品評会にだすことにした。会場にはシャーロットやテンプレトン、アラブルやファーンも同行することになった。

到着の夜、シャーロットは卵を生むために新しい巣を作り始めた。そして卵を生んだシャーロットはすっかり弱ってしまった。一方、品評会ではウィルバーは1等になれなかったが、シャーロットが心をこめて織ってくれた「つつましい」という文字があったために特別賞が与えられた。ズッカーマンはウィルバーを長生きさせることを宣言した。小屋に戻ったシャーロットは力尽きたように死んだ。

そして翌年の春。ウィルバーがしっかり守り続けた卵袋から、シャーロットの子供たちがぞろぞろでてきた。だが子供たちは口々にさようならといいながら風に乗って飛んでいってしまった。取り残されてガッカリするウィルバーに、「今日は」と呼びかける、3匹のクモがいた。飛べない小グモだった。ウィルバーはまた仲よく暮らしていく仲間ができたのだ。このシャーロットの子供をせいいっぱい可愛がってやろうと思う。そして、いつかこの子供たちに、あのシャーロットのような美しい文字で、“この入り口はかつてシャーロットの住居でした、彼女は多才で美しく誠実そのものでした、彼女の思い出は永遠に消えない”そう書いてもらおうと思っていた。

作品から学んだこと

私は、映画化され話題になったこの作品に前々から見たいと思っていた。主人公が豚で、多くの登場人物が動物ということで、どのような物語を繰り出すのか知りたかったからだ。"シャーロックからのおくりもの"を見てお母さんのおっぱいを吸うことができずにいるウィルバーは、「育たない仔豚」と判断され、殺されそうになる。それを救い、自分が守ると決めたファーンは、ウィルバーに対して子供ながらに一生懸命愛情を注いでいた。その姿は微笑ましく、また、大人になって忘れてしまった何かを思い出させてくれるものでもある。また、この映画で友達は、私たちにとって必要不可欠なものであることを再認識させてくれる。友達とはどういう相手なのか、「友情」とはどういうことなのか、そんな言葉で説明してもわかりにくいことを、この映画を観ることで知ることができる。

今回、作品を紹介することに挑戦してみて、自分が感じたことを他人に伝え自分の感動を理解してもらうことはいかに難しいかを改めて実感した。自分が「おもしろい」と感じてただ自分の感情だけをひたすら伝えるだけでは相手の心に響きにくい。そうではなく、簡潔にわかりやすく、そして自分が印象に残った場面の例をあげてどのようなおもしろみが作品の中にあるのかを説明に交えるべきなのだということを学んだ。

(さかぐち・なぎさ：幼稚園教員養成課程)

ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』

:選んだ理由

早川 一穂

『エルマーのぼうけん』

ぼくのお父さんの名前は、エルマーといいます。ぼくのお父さんは子どものころ、ある雨の日に1匹の猫に出会いました。ぼくのお父さんは、その猫を見てひどく気持ちが悪そうだと思ったので、「うちにこないかい？」と猫にききました。猫は、薄汚い自分に親切にしてくれる人がいることに、心底驚きました。そして、猫とぼくのお父さんは出会ってすぐに仲良くなりました。しかし一緒に家に帰ると、ぼくのお父さんのお母さんはとても怒りました。「エルマー・エレベーター!!1度、宿無しののら猫に食べ物をやれば、町中ののら猫に食べ物をやることになるんだからね!!」と。だからエルマーは、お母さんに内緒で地下室で猫を養っていましたが、3週間後に見つかってしまいました。

仕方ないので、猫とエルマーは公園に散歩に出かけて、なにか楽しい話がないかなあと考えました。エルマーは、空が飛びたいと猫に話しました。すると猫は、かわいそうな話があるよ、とエルマーに猫が先日、旅行に行ったときの話をしてくれました。「みかん島からびよこびよこ岩をわたったところに、誰も近づこうとしないどう猛で怖い動物がたくさんいるどうぶつ島があるのさ。その島は、馬のひづめのように真ん中を大きな川が流れている。だから動物たちは長い間、反対側へ行くためにわざわざぐるっと川沿いを行っていたんだ。」エルマーは、空を飛ぶ話とどう関係しているのかと、はらはらして聞いていました。「しかし、4ヶ月前に、空に浮いていた雲から1匹の赤ちゃんのリュウが落ちてきた。動物たちは、『こりゃいいものが落ちてきた』と大喜び。それから、川の渡し役として赤ちゃんリュウを太いロープで首をしばって無理やり働かせているんだ。もし、そのリュウを助けたらお礼に世界中を背中に乗せて飛んでくれるかもしれないよ。」と猫は話しました。

その気になったエルマーはお母さんに内緒で1週間後、お父さんのカバンに冒険の準備をして、みかん島行きの船にかくれて乗り込みました。猫は、もう歳を取りすぎていて冒険は出来ないのではエルマーを見送りました。エルマーが持っていったものは、チューイングガム、キャンディー2ダース、輪ゴム1箱、歯ブラシと歯磨き粉、虫めがね6つ、くしとブラシ、七色のリボン、船に乗っている間の食料でした。エルマーが船に6日6晩かくれていると、船員の、次はみかん島だぞという声が聞こえました。見つかると家に返されてしまうので、こっそり船をおりたエルマーは、どうぶつ島に向かうために海岸を目指しました。海岸にたどりつくと、点々と海の上を岩が続いていてその先に小さく、緑のかたまりが見えました。そこから、7時間かけてエルマーは、ぴよんぴよん岩を飛び続けました。そして、一番しみの岩からどうぶつ島に、ぴよん、と飛び移ることが出来ました。

ひとまず、エルマーは島を2つにわけている川を探すことにしました。まず始めに、あわてん坊のネズミに出会いました。ネズミは、しんにゅうしゃだ~と言って、島のどこかへ消

消えていきました。エルマーは、ネズミが誰かに言いつけないか心配になりました。夜になって川を目指していると、どこかから声が聞こえました。「おや、サル君、何をせおっているんだい？」「病気のおばあさんじゃないかね？」と2つの声が聞こえます。エルマーはこわくなって「そうとも」と答えて駆け出しました。後になって、その2つの声は、2匹のカメだったことが分かりました。てくてく歩いていると、2つの大きな岩が話をしていました。

「誰かがこの島に忍び込んだらしいぞ。ネズミが言ってたからなあ」「気にしすぎだよ～あわてももののネズミの言うことだ。もうおやすみにしよう」と。それは岩ではなく、大きな2匹のいのししでした。言い終わると2匹は、ジャングルの中に消えていきました。

エルマーは夜中歩いて、やっと川にたどりつきました。川沿いに行こうとエルマーは思ったのですが、どうぶつ島は曲がっているのです。まっすぐに進んでいたエルマーは、川から離れてジャングルの中を進んでいました。すると、7匹のトラに出会いました。トラはとてもおなかが減っていました。そこでエルマーはチューインガムを放り投げ、トラが食べている最中に逃げ出しました。どんどん歩いていくと、大きな沼に入ってしまったのです。すると、下からぐわっと角でおしりを空中に持ち上げられてしまったのです。なんだ？とエルマーが思っていると、姿を現したのは、角がくすんできて泣いていたサイだったのです。そんなサイにおそわれないために、エルマーは持ってきていた歯ブラシと歯磨き粉をあげました。サイがそれで夢中になって角を磨いているので、エルマーはさよならと手を振りました。

それからエルマーは、もとの道に戻りました。そこからすこし先へ行くと1匹の動物が怒っている声が聞こえました。いってみると、1匹のライオンがタテガミをぐちゃぐちゃにして怒っていました。そしてエルマーを食べるといっているので、食べる前になぜそんなに怒っているのか、エルマーは聞きました。「お母さんライオンがもう少しで島に来るんだ。このタテガミをどうにかしないと」とライオンは言いました。そこでエルマーは、七色のリボンとブラシをあげました。ライオンは、上機嫌になりタテガミをセットし始めたので、エルマーはその間に逃げることにしました。

やっとリュウの渡し場についたのですが、リュウは川の反対側にいるのでいませんでした。これからどうしようかとエルマーが考えていると、ドスンと大きな音をたててゴリラが現れました。ゴリラは、ひどく苛立っていてエルマーに乱暴しようとしたのですが、いきなり、「かゆい!!」と言いサルを6匹呼びつけてノミ退治をさせ始めました。しかし、ノミは小さくてなかなか見つかりません。そこでエルマーは、虫めがねを6つサルに渡して、その場から逃げました。ゴリラは、サルに囲まれて前が見えなくなっていたので、簡単に逃げられました。

エルマーは、どうやってリュウがいる反対岸まで行って、リュウを助けようか考えました。そうすると、ますますリュウがかわいそうになってきました。リュウは、ゴリラに羽をねじられて無理やり反対岸に渡らされて、ロープを引っ張られると、首が痛いので帰ってこなければならぬのです。

考えていると、川でバシャンと音がしました。下を見るとワニがいました。ワニはエルマーを食べたくて川に入ってくるように誘います。そこでエルマーは逃げ口上でとっさに、「キャンディーなら持っていますよ」といいました。すると、川からぞろぞろと17匹もワニが現れました。そこで、エルマーはいい考えを思いつきました。「さあ、1本は岸にさしますよ。キャンディーは水にぬらさない方がいいですから。」という、1匹のワニが岸へあがってきました。そのワニのしっぽに、2つ目のキャンディーをくくりつけます。そのようにして、しっぽにどんどんキャンディーをくっつけていくと、長いワニの橋ができあがりました。ひよいひよいとワニを渡って行くと、反対側の岸につくことができました。

反対側の岸には、騒ぎに気づいたリュウが出てきていました。動物たちが、エルマーは侵入者だと気づき始めたので、急いでロープを切りました。そしてエルマーとリュウは、広い空へと飛び立ちました。リュウは本当にエルマーに感謝しました。そして、2人は、2度とこんな島にくるものか、と思いました。

選んだ理由

I. リトードルをやり終えて

久しぶりにこの本を読み直したのですが、会話の表現や動物の描写がおもしろく、この年齢でも楽しんで読むことができました。しかし、自分が読んだ話をリトードルするというのは、とても難しいと感じました。そのお話のおもしろさを失わずに、伝えなければいけませんから。けれど、やっていくうちに、ああこの作者はここを楽しんで書いたのか、というところが少しはわかって、おもしろかったです。

II. なぜこの本を選んだのか

この本が、僕が初めて読んだ長編児童書だからです。そして、子どもだけでなく、中高生や僕たちの年代の人に、もう一度、児童書に興味を持ってほしかったからです。児童書は、子どもの時に読んでおもしろいのですが、歳をとってから見ると意外な背景や設定に気づけたりしておもしろいと思います。その楽しみを、多くの人に知ってもらいたいですね。